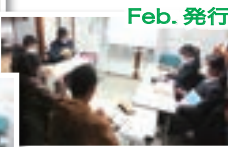


幼稚園から大人まで「ひとつながり」の、  
本当に大切な学びを求めて。



2021年度

学校法人 北白川学園「山の学校」クラスだよりと

エッセイ

# 山びこ通信

北白川  
幼稚園 p.36

小学生 p.3

中・高生 p.12

大学生・一般  
p.19

## 希望と不安の中で 今を生きること

山の学校代表 山下 太郎

ローマの哲人セネカは「希望のあとを不安が追いかける」という趣旨の言葉を残しました。「こうなればいいな」という願望は、「こうなったら困る」という不安と紙一重であり、何かを期待する心は、それが手に入らない未来への不安と恐れを招きかねません。

恐れは望みのうしろについてくる。そのような歩みに不思議はない。どちらも心がどっちつかず、つまり、未来に何が起きるか不安なために生じるのだから。だが、どちらも、最大の原因は私たちが現在の事態に適切な対応をせずに遠い未来の事態に思考を先走らせることにある。こうして、先見という人間に与えられた最大の恵みが災いへと転じてしまうことになる。(セネカ『倫理書簡集』5、高橋宏幸訳、岩波書店)

セネカは人間に与えられた「先見」という恵みが災いをなすという逆説を語っていますが、大人にとって、いまさら「先見」を捨てる生き方は選べません。未来を思い描く様々なイメージの活動に小休止を与えるには、「今を生きる」意識を高めることでしょう。セネカに限らず、ローマの賢人たちは口をそろえて「今を生きよ」というメッセージを残しました。わが国の古典にも「一期一会」をはじめとした同趣旨の言葉をいくつも数えることができるでしょう。

「今を生きよ」と言われて、具体的にどのような生き方をイメージすればよいのでしょうか。私の場合、仕事柄、この言葉を聞くと、真っ先に一心不乱に遊ぶ幼児の姿を思い浮かべます。幼児の遊びは、これをやればほめられるとか、有利な立場に立てるといった、なんらかの利得を期待してなされる行為ではありません。大縄跳びで10回跳べた子は、誰に言われなくても10回以上を目指します。かりに跳んだ回数で成績評価が行われるなら、それは遊びでなく苦役に早変わりします。目指す回数が跳べればほっとし、跳べなければ歯を食いしばって練習するかもしれませんが、跳ぶ回数で他人と競わされると、大縄跳びはいっぺんで嫌になるでしょう。

この話題に関して、スティーブ・ジョブズ氏（アップル創業者）がスタンフォード大学の卒業式で行ったスピーチの言葉が思い出されます。同氏はスピーチのはじめに、「点と点をつなげる」〈▶巻末ページへつづく〉

● 北白川幼稚園 山下育子のダイアリ (<https://www.kitashirakawa.jp/ikuko-diary/>)

自然と子どもたちの世界 より 副園長 山下 育子

p. 36

### クラス一覧

(2022年2月時点)

★印は新規開講

※最新情報は、ホームページ  
でご確認下さい

#### ●小学生 …… 3~11、15

しぜん かいが つくる 将棋教室  
ことば 西洋の児童文学を読む A  
かず れきし ……15

#### ●中・高生 …… 12~20, 27

西洋の児童文学を読む B,C  
西洋古典を読む  
英語で学ぶ歴史と文化 歴史  
中学英語 中学数学  
高校英語 高校数学

#### ●大学生・一般【語学】 ……19~29

ラテン語 ……★(右記)  
ギリシャ語 ……★(右記)  
現代ギリシア語  
イタリア語  
フランス語  
ドイツ語  
韓国語 ……★新任(右記)  
ロシア語 ……★(右記。「講読」は p.26 へ)  
教養英語  
英語講読  
ディケンズ『ボズのスケッチ』  
シェイクスピア『ロミオとジュリエット』  
アーレント『全体主義の起源』

#### ●大学生・一般【ゼミ】 ……29~37

英語で味わうシェイクスピアのソネット  
漢文入門 漢文講読  
東洋古典を読む ……★(右記。p.31 へ)  
調査研究 (p.27)  
現代社会を考える  
経済 ……★(右記。p.34 へ)  
現代世界史  
西洋近代思想の古典を読む  
日本文化論を読む  
ギリシア・ローマの歴史を読む  
身体とところ ……★(右記)

巻頭文

## 希望と不安の中で 今を生きること …… 1

● 関連記事

・山下育子のダイアリ  
自然と子どもたちの世界 より …… 38

### ★ 新規開講情報 (2022年2月時点の予定)

最新情報は、ホームページでご確認下さい。

※新規開講以外のクラスも空きがあれば随時お入り頂けます。

#### ● 新規開講 (受講生が集まり次第、随時)



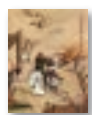
#### ロシア語入門

テキストは『名作に学ぶロシア語』  
(ナウカ出版)を予定。  
ただしこちらは絶版のため、受講  
生と相談して決めます。



#### 英語講読 B

シェイクスピアによる悲劇『ロミオ  
とジュリエット』を読み進めていき  
ます。



#### 東洋古典を読む

いくつかのテキスト候補から受  
講生の関心にそってテキストを  
決定し、授業を進めていきます。



#### 韓国語初級 (1月後半~)

基礎を一通り習った方が、おさらいを  
しながら基礎を定着させていきます。



#### 身体とところ

身体で生じる様々な現象に対し  
て裡から気づき、裡から活き活  
きとした力を産み出してやまな  
い、真に健康な生き方のありよ  
うについて、みなさんと一緒に  
考えていきます。



#### 経済

ベーシックインカムについての基本書  
を読み、その理解を深め、その是非や、  
日本における実現の可能性について、  
みなさんと議論していきます。

#### ● 春学期 (2022年4月~)

#### ギリシャ語初級文法

テキスト:『ギリシア語入門 新装版』(岩波書店)

1年間を目安に、テキストを一通り学びます。zoom 対応。



#### ギリシャ語初級 (文法中心)

テキスト:『古典ギリシア語初歩』(岩波書店)

1年間を目安に、テキストを一通り学びます。zoom 対応。



#### ギリシャ語初級

テキスト:『Thrasymachus』

週1コマコース/週2コマコースがあります(対面のみ)。

学習効率からは後者がお勧めです。



#### ラテン語初級 (文法中心)

テキスト未定 (HP でご確認下さい)。

1年間を目安に、テキストを一通り学びます。zoom 対応。

#### ● 秋学期 (2022年9月~)

#### ラテン語初級文法

テキスト:『ラテン語初歩 (改訂版)』(岩波書店)

テキストを2学期間(24回)かけて一通り学びます。



少し足を運べば、森や沢のある環境を最大限に活かし、自然の恵みを様々なに享受する時間、それが、しぜんクラスです。何をどう受け取るのかといえば、日によって、人によって実に様々なのですが、手足や目、耳、鼻、口など体中から受け取ることの出来る、自然のものたちからの刺激、言わば「自然の先生たち」からのメッセージに耳を澄ますような時間と言えます。

一見遊びのように見える様々な取り組みの中で、子どもたちがそれぞれ何を受け取っているのか、ここでは全てを紹介しきれませんが、いくつかの例から想像して頂けましたら幸いです。

・今年の春、筍はほんの少ししか見つかりませんでした。それでも探す過程は楽しいものでした。秋には拾ったイググリを開けて見るも、実は殆ど無くてがっかりしたこともありました。「思い通りにいかない」のが自然です。

その代わりに、石段周辺で、むかごがたくさん取れました。それらを小さな焚き火で焼いて食べましたが、その美味しさにみんな感激していました。「思いの外の喜びがある」のもまた自然です。

・森の中では、面白いもの、素敵なもの、不思議なものが沢山見つかります。定番のドングリや松ぼっくりの他、見た目も触った感じも「どらやきみたいなきのこ」であったり、美しいピンクの木漏れ日であったり、頬ずりしたくなるような（というか、実際にしていました）苔であったり、無数の出会いがあります。「ロケット」や「ライオン」（に見える木片）を見つけた S ちゃんは、大切にそれを抱きしめて持ち帰りました。

・雨の日や、森へ出かける前など、室内で過ごす時間は、日頃の自然に関する出来事を綴った絵日記の発表をしたり、「自然のクイズ」を出し合って（家で「鳥クイズ」を作ってきてくれた人も！）、そこからディスカッションに発展したり、或いは森で採取した素材を使って、教室で粘土やお香を作る取り組みをしたりしました。

杉の葉を使ったお香作りでは、丹念に粉状にする工程でも香りが立ちこめて、固めて乾燥させた完成品に火を灯すとまた別の香りがし、ゆらゆら形を変えゆく煙も面白く、能動的に記録や感想を書き始める姿もありました。

・ロープをぶら下げて作るブランコやアスレチックは、木々の逞しさやしなやかさを体に覚えさせてくれます。また、シンプルですが、起伏のある山の中で鬼ごっこやリレーをしたり、斜面をずるずる滑りながらもよじ登ったり、木登りをしたりしているときは、体全体が森との対話をしています。森の中では「手足」ではなくて、「前足と後ろ足」を使った方が有利な場面もあることを、地面が教えてくれます。

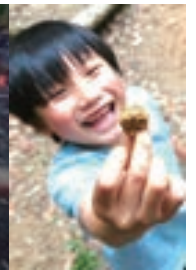
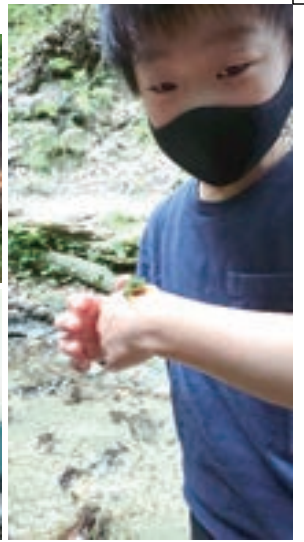


・生きものたちとも沢山触れ合いました。

あるとき沢で見つけたカエルを私が手のひらにのせて差し出して、みんなに見せながら、「かわいいね。友だちだからね。」とカエルに話しかけていると、「びよん」と腕まできました。さらにカエルを見つめながら話しかけ続けていると、次に「びよん」とシャツの胸ポケットに飛び込みました。みんな大笑いしていました。

虫採り網でとったり、飼育したり、或いは姿は見えないけれど、向こうで囀っている鳥の声に耳を澄ませたり、様々な方法で向き合う折々に、それぞれの生きものたちが「今、なにを考えているんだろうね」「どんなふうに見えるんだろうね」とさりげなく問いかけるようにしています。

「しぜん」といえば、何でしょう。春学期の最初にみんなに問いかける中で、「森」「山」「川」「風」など色々と子どもたちが挙げてくれました。「『人間』は、どちらでしょう？しぜんかな？それとも、そうじゃないかな？」今年度からBクラスを共担して下さることになった中村先生が、そのように問いかけて下さいました。「しぜんだと思う」と答える人もいれば「しぜんじゃないと思う」という人もいました。どんな風に「しぜん」と同じなのか、異なるのか。生徒の皆さんには考え続けてみて欲しいことです。



## 『しぜん』B

担当 中村 安里



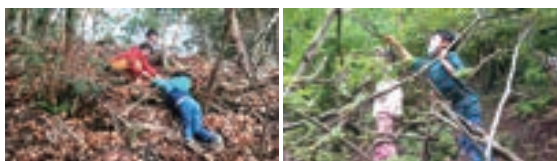
皆さんにとって自然と聞くとどんなイメージがありますか？

「自然」という言葉の由来として日本には、自然（じねん）という言葉があります。自然とは自ら然る、すなわち人間の作為のない「そのまま」の在り方が自然である。と考えています。仏教で言う法（真理）が「そのまま」に顕現していることを示す法爾（ほうに）と自然とは同義語で、その両者をあわせて「自然法爾」という熟語ができました。自然な状態とは、一人で独立して故意に何かをなそうとするのではなく、自然という大きな存在の一部として悠々と生きていくことに思えます。また英語の自然（nature）も元々は語源をたどると、誕生を意味しています。natal（出生）、nativity（生来の）、nature（本質）はみな同じ語源です。生まれたものは何であれ、死ぬことになるのが自然というものです。私たち人間も同様に生まれて死ぬ存在であり、私たちもまた自然の一部なのです。

さて話がだいぶ広がってしまいましたが、自然のクラスではその姿が本当によく現れています。自然のクラスにはこれをするという明確な目的があるわけではなく、山の中で森の中で一人一人の中にある個性が自然界

との関わりを通じてそのままに現れてきます。

例えば、ずっと土を掘ることに夢中になり、全てを忘れて自分自身すらも忘れてひたすら土を掘り続けている人、あるいはどんな些細な生き物でもすぐに発見して周りの人たちにもすぐに伝え生き物を発見したときの驚きを周りとともに共通する人、自然界の世界、生き物の世界を多彩な色使いで表現し、生き物の立場から自然を表現できる人、周りとは少し距離を取りながら、色々な状況を一步引いて受け入れることでメタに物事を捉える人、自分の背丈よりも遥かに高い山や急な坂を全身で登っていく人、どこでも巧みに木登りをしていくことができる人などなど本当に多様で多彩なあり方が同じ場に溢れかつ、全てのあり方が互に関わりあいながら意図的ではないにも関わらず全体として笑いが絶えず生き生きとした状態をいつも楽しんでいるのです。まさに「自然法爾」の状態の中で我を忘れて遊ぶ中で自然を味わい、そして友の中にもある自然を楽しむことができるのです。



また同時に、山の中で薪を燃やして、焼き芋を作ったり、山で採れた梅を使って梅シロップを作ったりする中で、自然界と繋がって生きていくことを、多彩なメンバーたちと共に経験していく時に、全てのもが変化しながらも互いにつながり生かしあっている世界が現れています。薪の中で燃えていった木も、そして焼き芋をしていただいた芋も一つの同じ自然のいのちであり私たちはそのいのちの変化の中で生かされてそして互いに繋がって生きています。

そして面白いことに、自分よりも遥かに大きな自然界に向き合う中で、さっきまで助けを求めていた子が、次の瞬間は一人で黙々と向き合い、そして次の瞬間には誰かを助けようとしている。そんな姿がごく自然に溢れているのです。自然のあり方は助け合いと生かしあいの世界です。確かに、自然界の中には厳しい生存やいのちを殺すことで生かされているという現実があることも確かでしょう。ですが、自然界の中で子供達と時間を過ごす中で気づかされることは、そういった生存に関わる状況を全て包み込むようなあたたかさと思いやり、そして何より我を忘れるほど夢中になり楽しむことができる、そういった時間を子供たちは過ごしているということをこちらの方が気づかされることが多いのです。

さて話がだいぶ壮大になってしまいましたが、壮大に思えるお話が自然のクラスには一つの遊びや発見や共同作業の中に溢れています。クラスのみんな、一人一人に出会えたことを本当にありがとう。

## 『かいが』 A・B

担当 梁川 健哲

「かいが」は「しぜん」と共通項の多いクラスで、山の学校の環境の恩恵にあずかり、自然の事物と向き合う時間を積極的に設けています。違いは「描くことを通して」向き合うことです。描こうとすると不思議なもので、いつもの「見る」が「ものすごく見る」に変わり、気づかなかった発見が沢山訪れます。今後はもう一步進んで、「どう見るか」について考え出すと、さらなる発見があり、世界が違って見えてきます。

勿論、何かを観察しながら描くことだけが絵ではありません。もう何を描きたいかが心の中にあって、教室に着くなりずっと空想しながら描いている人もいます。何も見ないで描いているのではなくて、普段からインプットされたものを見つめ、再構築しながら、より見えるようにしていく作業と言えます。

これらの過程で、表したいものにぴったりくる表し方は何か、画材は何がよいかという模索と実験が行われます。クラスでは作品そのものの「見栄え」よりもむしろこれらの過程を大切にしています。

今年度のここまでの様子を幾つか紹介させていただきます。

・様々な自然のものと向き合う。

時には石段の外に咲く季節の花々を、時には生花店で仕入れた切り花を描きました。また、春には筍を観察して描き、夏から秋にかけてはカマキリやカエルに夢中になりました。冬には雪虫をおいかけ、また、小さな焚き火を作って炎をスケッチしました。中には炎そのものではなく、それらをみんなが囲んでいる様子に目を向けた人もいます。皆さんには、様々な視点を見つけ続けて欲しいです。

・そもそも絵の具とは何か、から考える。

大雑把に言えば、「色の素となるもの+接着剤」が絵の具です。そして「色の素」は元々、土や鉱石や貝など、自然由来のものです。自然の中から自分たちなりに「色の素」を見つけ出せば、自分たちで作った絵の具で絵を描けるのではないかと。そんな問いかけをしてから取り組みました。

色とりどりの落ち葉や砂に目がいき、「絵の具」として使われました。今後も膨らませたい取り組みです。

・各自がテーマを持って臨む課題制作。

鳥のモチーフが気に入っているSちゃんの例。ルリビタキを版画にしようと考えましたが、あえて可愛さを強調しようとデフォルメしてみました。今度は大きな絵を描いてみたいという憧れから、やはり鳥のモチーフを図鑑やインターネットの画像検索から探し、鳥の構図を模索中。今度はアカショウビンです。

夕焼けをモチーフに様々なグラデーションを試みる事がテーマになりつつあったHちゃんは、夏休みに見た夕焼けが決定的な印象を与えたようで、教室でも、今、目の前に広がる夕焼けを見ながらも、「あのときの夕焼け」をいつも重ねて見ているのではないかとこの印象を受けました。これからも、好きなテーマを色々見つけて探求し続けて欲しいです。

他にも、デッサンにチャレンジして光と影を発見したり、パターンデザインを試みたり、混合技法を工夫してモチーフの質感をより伝えようとしていたり、個別に課題を探し続ける姿勢が見られました。ある時は鉛筆をカッターで削ることで芯を好みの形に調整できることを伝えると、クラスの時間の大部分、鉛筆削りにはまっていることもありました。先は多少ガタガタになりましたが、それらはものすごくカッコイイ鉛筆に、私には見えました。

様々な道具や描画材を絵画では用いますが、それらは一筋縄ではいかないものです。絵の具のにじみ一つとっても、微妙な水加減や気候、運筆の速度によって変化します。またモチーフにしても、日が傾けば光はどんどん変わるし、花は枯れるし、虫も動き回ります。(或いは描き手の心の中も日々変化します。) このように、動的な世界に身体感覚を持って向き合うところに、描くことの確かな意味があると、みんなの様子を見ながら改めて実感しています。



このクラスでは、秋学期から「ひねもす工作」をしています。ブロックで遊ぶことが好きな小学生とは、きっと親和性が高いと思います。写真のように、紙パイプを自分で切り出して、組み立てます。ひねもすはブロックにあたる紙パイプそのものを自分で作り出すことができ、夢があります。問題は、紙でできていること。プラスチックと違ってやわらかいので、紙と対話できるまでは、なかなか思ったように組み立てられません。そこで、ゆっくりーから技を覚えてもらっています。

1回目は、右の写真にあるようなロボットを作りました。これには、永字八法のような基本が詰まっています。長さをそろえることや左右対称であることの大切さ、関節の作り方などは、これ一つで学べます。この基本の形が、犬やキリン（足を四本にする）、天使やドラゴン（羽をつける）、飛行機（手を翼にする）やヘリコプターなど、いろいろなものに発展していきます。「作るものが思い浮かばないなあ」と思ったら、いつでもここに帰ってきてほしいと思います。

2回目以降は、2年生の Ryo 君は、ヘリコプターと発着場、リール付きの釣り竿、鉄砲、マジックハンド、ジープを作りました。



(上) 紙パイプ  
(下) 上の紙パイプを組み立てたロボット



2年生の Zin 君は、ロボットの改良型、クワガタ、雪の結晶、そして3週かけてドラゴンを作りました。

3年生の Ko 君は、ロボットの二号機、ティラノサウルス、剣と盾、パンタグラフ付きの電車を作りました。

最初は、棒を同じ長さに切ることも、穴を繰り返し開けることも、そして棒をそれぞれの穴に通すことも、困難だったと思います。それを受講生たちは、「作りたいものを作る！」という一心で、いつのまにか克服していました。そうした、あきらめない姿勢を、応援しています。

冬学期も、これまで同様、受講生たちにまず作りたいものを聞いて、それをどうやったら作れるかを、いっしょに考えていきます。そこで折子を見て、もっと丈夫な関節の作り方や、逆に動いてほしくない部分を固定する方法などを、伝授したいと思っています。

引き続き、じっくり、ひねもす工作を楽しみましょう！



## 『ひねもす』(つくる4~6年) 担当 福西 亮馬

このクラスは、『ひねもすキット』という道具を使って、紙パイプ工作をしています。頭の中の設計図を大事にし、手を動かしてそれに形を与えることを応援しています。どういうものが作れるかは、「百聞は一見にしかず」です。毎回、作品とクラスの様子を山の学校のブログに掲載していますので、ご覧ください。(カテゴリーは「つくる」です)



ひねもすキット



今年から参加した1年生の Syu 君は箱型 のものをよく作りました。平面から立体に起こすという作業で、いろいろな工夫を試みました。レーシングカー、船、飛行機、そして虫が好きということで、虫の集まる樹木などを作りました。

春学期まで通ってくれた4年生の Sae ちゃんは、「だれかにあげる」というモチベーションで、かわいいものをよく作りました。弟や妹に、花壇、うちわ、輪投げ、なわとび、ビー玉ころがしなどを、そしてお母さんにハンドバッグを、お兄ちゃんに天空の城ラピエタのタイガース号を作りました。



6年生の Sin 君は「つくる1年」でスタートした時から6年間ずっと通ってくれました。その間に Sin 君が製作したものは数えきれません。最新作は宇宙船。船内にロボットがぴたり納まります。以前作ったサンダーバード2号の踏襲だと思われます。また、魔弾ガンという銃を作ったこともあり、これには実際にひねもす製の弾を込めることができます。こうした「格納」という機能的な作品群には、Sin 君がこれまでに磨いた技の体系が見られます。最後の冬学期が Sin 君にとって、一種の卒業制作のような期間になればよいと考えています。



ひねもす工作は、自分で問題を設定し、解答を見つける遊びです。そして手を動かしながら問題の本質を考えます。数学と同じで、面倒なこと(数学でいえば計算、ひねもすでいえばパーツ作り)をなるべくしないようにするにはどうしたらよいか、シンプルに作るにはどうしたらよいか、この点でまさに面倒くさいほど考えます。そしてそのときの「これか……?」から「これだ!」に変わる、着眼点のよさが、作りやすさにつながります。

こうした問題設定と問題解決で、一生懸命に遊んだことは、遊びが学課にかわっても、根っこでつながっていると思います。



## 『将棋教室』

担当 中谷 勇哉

インターネット上で放送されている ABEMA トーナメントに感銘を受け、そこで採用されている「フィッシャールール」(持ち時間は短いが一手指すごとに数秒増えるというもの)を導入するため、最近是对局時計を使っています。

対局時計の導入目的の一つは直感力を鍛えることです。将棋は、深くじっくり考えるのも当然必要なのですが、実戦では毎回何十分も考慮できるわけではないので、数秒で直感(直観)的に指すことも必要になります。直感的とは、全くのあてずっぽうのことでなく、過去







の対局や深く読んだ経験から、自然に次の一手が見えてくる状態のことをいいます。数学の問題を何問も解いていると、新しい問題でも何となく解法が見えてくるような感覚です。

また、対局時計の導入は、対局に緊張感をもたせてくれます。持ち時間がないと、どうしても途中でダレてしまいがちになるので、これは効果的です。

緊張感をもって考えることで、直感力と集中力、そして思考力を身に着けてほしいと思っています。

## 『ことば』2年

担当 福西 亮馬

このクラスでは、春学期に全15冊『くまのプーさん 絵本』（ミルン、石井桃子訳、岩波書店）を読了しました。また秋学期に『しずくの首飾り』（エイキン、猪熊葉子訳、岩波少年文庫）を読み終えました。

この稿を書く時点では、『ぬすまれた夢』（エイキン、井辻朱美訳、くもん出版）を講読中です。エイキンの短編は、現実と非現実の間で、空想をあそばせてくれる、小学生にぴったりのファンタジーです。1つの短編は1人でも20分あれば読めてしまう量ですが、クラスでは1時間かけています。中でも「三人の旅人たちは」2時間かけて味わいました。わずか15ページほどですが、プロットが緊密で、何度読んでも筋をなぞる楽しみがあります。受講生たちも作品に魅了されたのか、泉が湧くように感想を述べていて、とても気持ちよく読めました。

音読し、読み手を交代する合間に私がコメントを加えます。それに対して、受講生たちも言葉を返します。そこで気づいたことがあります。受講生たちは、「もし現実だったら……」「もしこの人が……」「もし私だったら……」と、主役、脇役、作者（話の設定）、読者のあいだで視点を行き来させて、複層的に話しているということです。

そのように受講生たちが想像力豊かに読書を楽しんでくれると、「このテキストを選んでよかった」と実感します。本を読むということに、シンプルに時間を使えるのは、よいことです。今後も、本の選定、音読、内容確認のプリント作りの3つに注力します。

次のテキストの予定です。『ぬすまれた夢』のあとは、『海の王国』（エイキン、猪熊葉子訳、岩波書店）を読みます。気に入った作者の作風をより深く味わいましょう。

毎週ごとの内容は、山の学校のブログに記事を残しています。ご興味のある方はそちらもご覧ください。



## 『ことば』3～4年

担当 福西 亮馬

このクラスでは、春学期に『ポリーとはらぺこオオカミ』（ストー、掛川恭子訳、岩波文庫）の全3冊を読了しました。また秋学期には、『星モグラ サンジの伝説』（岡田淳、理論社）を読み終えました。どちらもユーモアに富む作品です。本を読んで知恵を仕入れるオオカミの、落語のようなしくじり。空飛ぶスーパーモグラに騒然となる、モグラ社会と人間社会。想像力を刺激される展開に、ページを繰るのが楽しくなります。内容については、山の学校のブログに書いていますので、ご興味のある方はそちらもご覧ください。

この稿を書く時点では、『びりっかすの神さま』（岡田淳、偕成社）を講読中です。「1日で読んだ！」という報告を受けると、私も内心にやりとします。岡田淳の作品は、ファンタジー要素の導入とどんでん返しが鮮やかで、爽快な読後感が味わえます。

『びりっかすの神さま』は、テストでびりになった人だけに見える「びりっかす」という、羽の生えた透明の小人（よれよれの

背広を着たおじさん）の存在がファンタジー要素となっています。その「びりっかす」を見るために、主人公の始はわざと最低点を取るのですが、次第にその最低点の仲間の輪が広がり、クラスじゅうに「見えた！」「私にも！」という歓喜の音があがります。そして読者の興味は、「もし、みんなが最低点を取ったらどうなるんだろう？」という方に向かい、そこでどんでん返しが待っています。

次のテキストは、『ポアンアンのにおい』（岡田淳、偕成社）と『二分間の冒険』（岡田淳、偕成社）を読みます。同じ作者の作品を幅広く味わいましょう。とくに『二分間の冒険』は、日本の『はてしない物語』『モモ』ともいうべき作品で、「時間」と「自分」をテーマにした傑作です。お楽しみに。

現在は、音読のあとに内容の確認プリントをしています。来年度からはそれを要約作りにシフトし、さらに内容の理解を深めたいと考えています。



# 『西洋の児童文学を読む』A（小学5～6年）

担当 福西 亮馬

このクラスは、2019年4月からはじまり、以下の本を読しました。

『はてしない物語』（エンデ、上田真而子訳、岩波書店）

『小公女』（バーネット、高樓方子訳、福音館書店）

『クローディアの秘密』（カニグズバーグ、松永ふみ子訳、岩波少年文庫）



現在は『王への手紙（上・下）』（トンケ・ドラフト、西村由美訳、岩波少年文庫）を、2021年11月から読みはじめています。すぐれた作品は、読者がゆっくり読めば読むほど発見がありますが、この作品もその典型です。クラスでは音読と要約を課し、丁寧に読む習慣を身に着けることを応援しています。

読むペースは、1章10ページずつです。受講生たちは、要約がすっかり板についてきました。それぞれがどのように要約してきたか、読み合わせするのがいつも楽しみです。

さて、物語の冒頭、ティウリは、騎士になる試験を受けるさなか、助けを求める声を聞きます。もう少しで念願の騎士になれるというときに、無視するべきか、助けるべきかで悩みます。そして騎士になればするだろうことを選択します。

「なぜ、ここに見えたのです？ わたしは明日、騎士になる、いま、わたしはだれとも話してはならないのです。それを知らないのですか？」

「わかっている。だからこそ、ここに来たのだ。（…）騎士であって騎士ではない人、をさがしていた。あなたこそ、ふさわしい方だ。明日、騎士の位につくに値すると認められた人。それでいて、まだ若く、評判にはなっていない。」

こうしてティウリの物語は始まります。その後、ティウリはある高潔な騎士の死に直面します。その騎士の使命を引き継ぎ、隣国へ向かいます。重要な手紙をたずさえて——。果たして騎士見習いティウリは、追手を逃れ、大山脈を越え、隣国の王のもとへ手紙を届けられるのでしょうか。守るべきものを持つことで、死に対する思いが増します。読者も「次の章はどうなるのだろう？」とハラハラします。

誤解による決闘。多弁を弄さない先輩騎士との格調高いやりとり。大山脈で知り合う、生涯の友となるピアック。これからの楽しみです。読むことでティウリを応援しましょう！

## 『かず』1～2年

担当 浅野 望



現在、小学1年生4名とこの授業をしています。みなさんととても活発で、いつも盛り上がり、授業するこちらも刺激を受けています。内容は毎回さまざまですが、用意する側として、「手をたくさん動かしてもらうこと」と「身のまわりの『かず』に気づいてもらうこと」の2つは常に意識しています。前者に関してはとくに迷路がお気に入りのようで、解いて遊ぶだけでなく自分たちでオリジナル迷路をつくりました。鉛筆の代わりに指を用いなければならないゾーンを設けたり、迷路のなかにジャンケンを組み込んだりと、想像力に満ちあふ

れていて素敵でした。身のまわりのかずについては市バスの時刻表を読んだり、とても大きな数について取り上げたりしました。人間の細胞の総数は37兆個らしいので（受講生の愛読書『はたらく細胞』より）、その数字を実際に書いてもらいます。すると、「こんなにゼロがたくさん並ぶんだ」と驚きの声が上がりました。

小学校低学年が受講生の授業を担当するのは今回がはじめてで、私で大丈夫なのだろうかと当初は不安でしたが、半年経った今では、生徒と講師の間で積極的にコミュニケーションがとれています。授業に取り組む姿勢からはもちろん、授業前後に交わされるお話の内容や語彙からも、（月単位どころか）週単位で成長がみられるのが驚きです。

## 『かず』 3～4年

担当 谷田 利文



このクラスでは、基礎力をつけるためのドリルと、論理的思考力をつけるためのパズルや表を使って条件を検討し、答えを導き出す問題に取り組んでもらいました。表を作る問題では、一時間集中して一つの問題に取り組み、独力で答えにたどり着く姿に、頼もしさを感じました。この思考力を、算数の問題をじっくり考えて解く際にも生かしてもらえればと思っています。

## 『かず』 5～6年 A

担当 浅野 望

この授業は、小学6年生1名と2人でしています。授業内容は生徒さんが持ってくる問題集や中学受験の過去問のうち、同じ問題を2人がそれぞれ解き、解けなかった問題やわからなかった部分を私が解説するというものです。



ある分野について体系的に教えたり、受験に直接役立つようなテクニカルな知識を提供したりすることはありませんが、問題を解くにあたっての考え方は丁寧に説明しています。また、解けた問題については逆に生徒さんのほうから私に向けて解説をお願いしています。他人にわかりやすく説明することを通じて、いっそう自分の理解が深まるからです。加えて、普段の学習やテストにおける答案もわかりやすく書くように伝えています。テスト本番の記述式問題では、見知らぬ採点者に向けて自分の考えをわかりやすく表現するのはもちろん大切ですし、普段のノートでは、復習する未来の自分がそれを見てどこでつまづいたか確認できます。何より、わかりやすく書くことで問題を解いている今の自分の考えも整理されます。正直、小学生の時点でこれを実践するのはかなり難しいと思いますが（もちろん、私もまだまだできないことです）、説明することの大切さに気づいてもらって、小学校を卒業したあとでもぜひいろいろなことを学んでほしいです。

## 『かず』 5～6年 B

担当 中村 安里

突然ですが、なぜ私たちは学ぶことを大切にしているのでしょうか？なぜ数学を学ぶ必要があるのでしょうか？こういったことを子供達と議論してみることも、また一つ学びが深まる機会になります。数学の法則を学び暗記したり、思考したりすることはあってもその背後にある世界観や美しさを感じることができなければ、その学びは生きる助けにはならないと思いますが、身体に染み込んでいくような学びまでは深まらない可能性があります。

山の学校では、自然が溢れる景色の中、時に自然界の中に数学的性質を発見し、そして数そのものの性質の不思議さをまず感じてみることからはじめ、そして自分なりの問いや疑問点に関して互いに議論していきます。そのプロセスの中で、単に、与えられたものを暗記するのではなく、自然界の中にある数の世界との関わりを深め、数の性質を学ぶ中で、その性質の背後にいる数々の先人達との知恵と関わり、そして山の学校で出会う人々と交流することで異なる思考法や着眼点、方法論に出会うことができます。学びとは世界と出会うことであり、世界とより深く繋がることでもあるのです。そして世界に根をおろしていくように学んでいくことができれば、その学びは多くの知恵を結



ぶと共に、私たちが根ざしている世界をも支えていくような人に育っていけると考えています。

数のクラスでは具体的には、自然数、フィボナッチ数、ローマ数字、四則計算の性質、偶数、奇数、交換法則、分配法則、無限、三角数、四角数、約数、倍数、素数、素数の無限性の証明、メルセンヌ素数、素因数分解、合成数、階乗、暗号の作り方、さらにはこの世界など毎回のクラスで一テーマずつ学んでいきました。

例えばフィボナッチ数を学ぶ時には、実際に松ぼっくりを取りにいき、全て素手で実



際に数を数えながら理解し、図を描いてみたり、レオナルド・フィボナッチという数学者の伝記を読んでみたり、応用的な問題をクラスの仲間たちと考えていきました。素数を学ぶ際には、実際に自然界を散策して、自然界の中にある葉っぱの分岐の数を調べてみる中で自然界にある素数を発見していきます。また、100までの全ての自然数に関してエラトステネスのふるい法という方法を用いて、100までの全ての自然数から素数を素手で発見していきます。そして、実際に発見した素数の掛け算で100までの全ての自然数を掛け算で現してみます。その作業を通じて、実はすべての自然数は、素数の掛け算で表すことができるということを理解します。そして素数の性質を理解する中でその応用として、素数は無限に存在することを証明していきます。

このような作業を通じて数という言葉は自然界との深い関わりの中で生まれてきたこと、そしてその数の性質は実に面白く抽象的な世界を捉えることができ、人間の想像を超えて広がっていくこと、そして一つの数の性質はまた別の数の性質を理解する手段となることを、具体的に手を動かしてみたり、本を音読し、そして議論を深めることで理解していきます。このような思考方法は何も数学にとどまらず全ての分野に共通することです。実体験を元に学んだことを抽象化して、その本質となっている性質を他の性質を発見する際に用いていく。というプロセス自体が生涯の学びにおいても非常に重要になってきます。

このクラスを通じて、大人であっても子供であっても共通する学びの奥深さを実感してもらえたら幸いです。「情緒を育て、物事の本質を理解し、そして多様な世界を創造していくこと」が学ぶことをより楽しくしていく秘訣だと考えています。今後もこのクラスの更なる発展を応援していただけたら幸いです。よろしくお願いいたします。

## 『西洋の児童文学を読む』B (中学生)

担当 福西 亮馬

このクラスは、2017年4月からはじまり、以下の本を読了しました。

- 『王への手紙 (上・下)』(トンケ・ドラフト、西村由美訳、岩波少年文庫)
- 『白い盾の少年騎士 (上・下)』(トンケ・ドラフト、西村由美訳、岩波少年文庫)
- 『はてしない物語』(エンデ、上田真而子訳、岩波書店)
- 『モモ』(エンデ、大島かおり訳、岩波書店)



現在は『トムは真夜中の庭で』(フィリパ・ピアス、高杉一郎訳、岩波書店)を、2021年4月から読みはじめています。この稿を書く時点で、15章まで読みました。残るは12章です。

各章ごとに要約をしています。要約は表面をなぞるのではなく、真珠採りのように、底へもぐる作業です。要点を短く伝えられるほど内容を深く知っていることになります。要約の取り組みは淡々としたものですが、すべての章の要約が一つにつながったときの達成感はひとしおです。それを何度か経験することは勉強でも強みになります。応援しています。

さて、『トムは真夜中の庭で』は、「時」と「成長」をテーマにした児童文学の名作です。主人公のトムは、真夜中のある時間になるとタイムスリップし、過去の庭園で、ハティという少女と出会います。そして現実の時間よりもハティと一緒にいる時間の方を選び、それを永遠にすることを決心します。

「庭園のなかの『時』はあともどりできるわけだから、」と、トムはつぶやいた。

「ハティは今夜またもの小さな女の子になっているだろう。そしたら、ぼくたちはいっしょに遊ぶんだ。」

その計画が破れ、トムがハティとの別離を経験する時、読者もまた人生の切なさを味わいます。そして大人になることを意識します。物語の構成に、聖書の「黙示録」が骨組みを、作者フィリパ・ピアスの少女時代の記憶が肉付けを与えていることも、この作品の魅力です。冬学期でちょうど読み終わる予定です。

来年度のテキストは、『赤毛のアン』（モンゴメリ、村岡花子訳、新潮社）を考えています。ご存じの通り、プリンス・エドワード島の美しさとともに、見えないものに対する想像力の大切さが心にしみる作品です。

男女問わず多くの読者がアンのことをもう一人の自分、アンの口癖である「腹心の友」（bosom friend）だと思ったことでしょう。「なぜなら友人は、いわば第二の自分であるから」（Est enim amicus qui est tamquam alter idem）というキケローの言葉（『友情について』80）をふと思い出します。

物語の終わりに、次のような一文があります。

she knew that flowers of quiet happiness would bloom along it. The joy of sincere work and worthy aspiration and congenial friendship were to be hers; nothing could rob her of her birthright of fancy or her ideal world of dreams.

アンは静かな幸福の花が、その道にずっと咲きみだれていることを知っていた。真剣な仕事と、りっぱな抱負と、厚い友情はアンのものだった。何もかもアンが生まれつきもっている空想と、夢の国を奪うことはできないのだった。（村岡花子訳）

読んだことのない人はお楽しみに、読んだことのある人はまたアンの友達になりましょう！ 新たな参加者をお待ちしています。

## 『西洋の児童文学を読む』C（中学生）

担当 福西 亮馬

このクラスは、2019年4月からはじまり、以下の本を読了しました。

『はてしない物語』（エンデ、上田真而子ら訳、岩波書店）

『小公女』（バーネット、高樓方子訳、福音館書店）

『クロードディアの秘密』（カニグズバーグ、松永ふみ子訳、岩波少年文庫）



現在は『リンゴ畑のマーティン・ピピン』（エリナー・ファージョン、石井桃子訳、岩波少年文庫）を、2021年9月から読みはじめています。この稿を書く時点で、第2話「若ジェラード」に入りました。石井桃子訳の魅力も相まって、一文一文が美しいです。音読するとさらにそれを感じます。そして要約を作るときも、物語の構造の見事さに感動します。小学5年生から受講しているMさんは、『はてしない物語』から数えて、55章分の要約をノートに作りました。いまでは簡潔に書くことがすっかり上手になりました。山の学校のブログにも残していますので、ぜひご覧ください。

さて、『若ジェラード』は、羊飼いの若ジェラードと領主の娘シアとの恋物語です。身分の差を意識する二人は、互いの恋心を冬の大地のようにじっと隠します。若ジェラードは十二歳のとき、迷子のシアとはじめて出会い、その後もシアのことを思い続けます。シアも同じ気持ちで会いに来て、たずねます。「おまえのサクらは、もう咲きましたか？」と。春が終わると、二人はなかなか会えません。その間、心を燃え木のように保ちます。しかし九年後、シアには隣の領主との結婚が決まります。

以下はこのあと読むサビの部分で、夜の情景です。

"Here come your stars," said Young Gerard. Suddenly she was enveloped in a falling shower, white and heavenly.

"The stars-!" she cried. "Oh, what is it?"

"My cherry-tree-it's in flower-" said Young Gerard,

「ほら、あなたの星が降ってくる」と若ジェラードは言った。突然、白い、天国の夕立のようなものにシアは包まれた。

「星！ 一体、何なの？」とシアは叫んだ。

「私のサクラの木が、咲いたんです」と若ジェラードは言った。(拙訳)

若ジェラードとシアは、今まで一度も花をつけなかったサクラの木から祝福を受け、これまでの二人の時間を思い出しながら、見上げてます。まるでBGM付きの映像を見ているようで、なんとも言えずロマンチックです。

本当を言うと、ドキドキしながら一人でこっそり読むのがよいのでしょうか。しかし、『リンゴ畑のマーティン・ピピン』は絶版なので、「こんな本があるよ」と周知しなければ、若い読者にはなかなか気付いてもらえません。それであえてテキストに選びました。

現在は中学1年生とマンツーマンですが、このCクラスは大人の方にも参加していただけます。またzoomも利用可能です。お待ちしております。

## 『西洋古典を読む』（中高生）

担当 福西 亮馬

このクラスでは、2019年1月より、ウェルギリウス『アエネーイス』（岡道男・高橋宏幸訳、西洋古典叢書）を講読しています。この春・秋学期をかけて第6巻を読み終え、この稿を書く2021年12月現在で第7巻の600行まで進みました。約2年間で、12巻全体の折り返し地点を通過したことになります。

第6巻はアエネアスの冥府下りです。古典作品は1行を訳す時間が長ければ長いほど記憶に残り、思い出して味わうことができます。それで『The Aeneid』（Robert Fagles 訳、Penguin Classics、ペーパーバック 2010）を使用し、ラテン語からの英訳で読むことに挑戦しました。

第7巻は日本語のテキストに戻り、ときに原文のラテン語ではどうなっているかを調べながら読んでいます。トロイア戦争で国を失ったアエネアスは8年間の放浪を終え、イタリア上陸の使命を果たします。ラティウム国のラティーンヌス王に気に入られ、その娘ラウィーニアとの結婚を約束されます。しかし天界でそれを快く思わない女神がいます。ユピテルの妻ユーノーです。

ユーノーはアエネアスの使命（ローマの礎を築くこと）を執拗に妨害します。第4巻では、なんとウェヌス（ビーナス）の力を借りてまで邪魔します。ウェヌスはアエネアスの母です。息子の安全を気遣うウェヌスは、アエネアスをカルターゴの女王ディードーと契らせ、彼女のもとに留めようとします。しかしそのようなユピテルに逆らう工作活動は、運命の進みを遅らせただけで、ディードーの自殺という不幸を生じます。これが前半の山場です。

後半では、ユーノーはついに最終手段に訴えます。「天上の神々の心を靡かせることができなければ、アケロンを動かそう」（7.312 flectere si nequeo superos, Acheronta movebo）と言い、アケロン（冥府）から復讐女神アレクトーを呼び出します。そしてアレクトーはラウィーニアの婚約者だったトゥルヌスをけしかけ、トロイア人（＝移民）を快く思わない勢力を糾合して、武器を取らせませす。

ユーノーはアエネアスのことを「もう1人のパリス」（Paris alter）と呼び、「このような結婚を、このような婚礼を祝えばよいのだ」（7.555 talia coniugia et talis celebrant hymenaeos）と、「イタリア」を「戦争」と結婚させます。ユーノーは結婚と出産、家庭の平和を司る女神です。そんな彼女が冥府の核兵器のような復讐女神を召喚し、戦争を願うのは、仇敵ウェヌスと手を結んだ時と同じぐらいに驚くべき展開です。

さて、作者ウェルギリウスは第7巻冒頭で「より大きな仕事（maius opus）を歌おう」と宣言します。涙多き戦争を通じて、トロイア人とイタリア人の血が混ざり、「より大きなローマが誕生すること」を。そして、トロイア人アエネアスから「ローマ人アエネアスへ」という、主人公の認識の変化も暗示されます。ユピテルの語る運命は、トロイアの再興ではなくてローマの誕生、過去を蘇らせることではなくて、未来を生むことです。物語前半のアエネアスは、おそらくその違いを認識していない節があります。つまり彼の覚醒は後半のお楽しみです。



こうしてアエネーアスは、ユピテルの語る運命のため（ゆえ）に、際限のない苦労を経験します。読者がそんな彼を応援し、ユーノーを嫌いになるのも理の当然です。しかしアエネーアスは、第3巻で「すすんでユーノーに請願を唱えよ（祈れ）」(3.438 *Iunoni cane vota libens*) という忠告を受けています。これはどう理解したらいいのでしょうか？

これは私見ですが、アエネーアスの筋を追うだけでは、おそらくこの作品に対して、もったいない読み方をしているのだと思います。アエネーアスが表の主人公だとすると、裏の主人公はユーノーなのかもしれません。なぜなら、ユーノーの認識の変化にもアエネーアスと同じパターンがあてはまるからです。つまり、トロイアを憎むユーノーから、ローマを慈しむユーノーへ。トロイア人アエネーアスによるトロイア再興を認めない女神から、ローマ人アエネーアスによるローマ誕生を認める女神へ、というように。

ユーノーはユピテルの決定に抵抗し、できるだけ運命の実現を遅らせようと考えます。その彼女が「考えをより良い方へ向け変える」(1.281 *consilia in melius referet*) のは、はたしていつのことなのか？ ユピテルはどうやってユーノーを説得するのか？ そして、第12巻で歌われるアエネーアスとトゥルヌスの一騎打ちで、なぜトゥルヌスは死ななければならなかったのか？ もっと言うと、第6巻でアエネーアスが「偽りの夢の門」を通して冥府から地上に戻ってきたという謎は、それ以降の巻で明かされるのか？ それらの疑問点を持ちながら、後半の山場を見ていきます。

現在は高校1年生とマンツーマンですが、このクラスは大人の方にも参加していただけます。また zoom も利用可能です。お待ちしております。

## 『歴史/れきし』（中学生/小学生） 担当 吉川弘晃



去年に引き続き、中学生向けクラスとして「歴史」を、小学生向けのものとして「れきし」を開講しています。コロナ禍のために一時的にオンライン授業を採用しましたが、テーマを決めて日本史（及びそれに関する国々の歴史）に関する本を教室に集まって読むというスタイルを取っております（これまで取り上げた教科書についてはホームページや『山びこ通信』過去号をご覧ください）。

2021年度の授業からは「自分で書く」練習に力を入れています。ある言語を使って自分の考えを言葉にする力、それを一定のやり方で文字として表現する力。私たちが日々の生活で当たり前実践しているように見えますが、そうした能力は決して自明のものではありません。

例えば、パソコンで日本語を入力するという行為はよく考えれば実に奇妙なものです。多くの日本語話者が使う「アルファベット入力」の場合、abcのキーを指で打ち込み、ひらがなを画面に表出させ、一連の文字を漢字・ひらがな・カタカナ（及びその他）の組み合わせへと変換していく（最近ではスマートフォンによる「フリック入力」という別の入力方式が当たり前になっています）。この方式に慣れるためには、一定の発声能力や識字能力だけでなく、適切に脳と声と指を連動させる身体感覚を長い時間をかけて習得する必要があります。そしてその環境を可能にしたのは、人類がさらに長い歴史のなかで培ってきた教育と技術であります。

けれども、そうした「書けること」の不思議さは見えづらくなっています。インターネットの飛躍的發展により、ブログや SNS といった様々な発信手段が増えた結果、私たちはまるで呼吸をするかのように、言葉を食べたり吐き出したりする日常を生きていかざるを得ない。するといつの間にか、ある言葉の意味もよくわからずに使ってみたり、相手の言葉をそのまま繰り返したりするようになる。その言葉が狂気や凶器になりうる場合、社会全体は大きな損害を蒙るでしょう。そうならないためには、「情報」の海のなかから、自分にとって「生きた経験」として「智識」を身につけることが不可欠であり、その他ならぬ手段こそ「書く力」です。

そんな片意地を張らずに「思ったことを自由に書けばいい」という声もあるでしょう。確かに、何かに接して最初に抱いた直感は大事にしてほしい。けれどもそれを自分自身の言葉として恥ずかしくない形にするには、表現の訓練がどうしても欠かせません。一人ひとりの人間のものの感じ方や伝え方は、同じ言語を使う人同士であっても、それぞれ異なるからです。この授業では、歴史に関する様々な文章を読んだ後で、それを自分の言葉で友だちや講師に伝える練習を行っています。

前置きが長くなりましたが、授業では教科書のまとまった分量をみんなで読んだ後、その箇所を要約する練習をさせています。でもこれがなかなか難しい。「自由感想文」であれば、自分が好きな箇所を「つまみ食い」して、コメントすればよろしい。けれども「要約」というのは、著者が伝えたいことを本文に即してバランスよく一定の

字数でまとめることです。自分の考えたことと著者が言っていることを区別し、まずは後者にのみ注意せねばならない。それこそが「人の話に耳を傾ける」ということです。これをしっかりこなそうと思えば、各段落のつながりは勿論、一つの段落のなかでの著者の文章の書き方にまで注意を払う必要があります。案の定、最初は生徒さんはみな苦戦しております（講師の私にとっても楽ではありません）。

要約に一度でも真剣に取り組めば、他人の文章のなかで自分が「分からなかったこと」や「同意できなかったこと」が少しは明らかになるはずですが、そこで初めて体感できるのではないのでしょうか。一定の長さの文章を終わりまで組み立てるのがいかに骨の折れる作業であるかということ。そして近年流行の「あなた自身のオリジナルな考え」なるものがいかに実現困難であるかということ。その厳しさに触れ、母語であっても「読み書き」は一筋縄ではいかないのだと「諦める」こと。もしこの諦念に突き当たればしめたものです。それ自体があなた自身にしか感じられない悩みなのですから。それを無理矢理にでも言葉にしてみる。それこそがネガティブな悩みをポジティブな歩みへと転じる実践であると言えます。

教室では生徒さんたちの努力の成果は、単なる「要約文」にとどまらず、自分の読解を加えた「書評」、さらに教冊の本を自分なりに検討した「レポート」（今年度も「赤穂浪士の討ち入りへの幕府の対応とその評価」や「江戸時代の将棋家元確立」といった興味深いテーマで書いてくれました）として形になっています。それらは教室で共有して全体での活発な議論につながっています。

## 『英語で学ぶ歴史と文化』（中高生対象） 担当 吉川 弘晃



この授業は、題目通り、ある地域の歴史と文化を英語を通じて学ぶことを表の目的にしていますが、実際には日本史や世界史への興味を介して英語を読む力をつける場でもあります。英語が「できる／できない」という意識は多くの日本語話者の意識を縛り続けていますが、実際には語学の習得に限りはないし、語学だけに時間を割けるほど人生は暇ではありません。差し当たっては自分にとって必要な声を聞けるように、あるいは愉快に思えるテキストを正しく読めるようになることが課題であると言えます。特に歴史や文化に興味があるけれども、外国語にはイマイチやる気が湧かないという方を（歴史も文化も英語ももっとできるようになりたいという方ももちろん）歓迎いたします。

今年度は、ブリテン島（英国）の歴史について、英語の多読用テキスト（Fiona Beddall, *A History of Britain*, Pearson Longman, 2006）を精読しながら学んでおります。語彙数のレベルは 1200 語程度（日本の英語教育で言えば中 3～高 1 レベル）です。テキストは全 6 章 30 頁強で構成されており、「ブリテン Britain」の 2000 年近くの歴史を一望できるようになっています。一口に「イギリス」や「英国」と言っても、複雑な事情があります。そもそも我々の知る「イギリス」が歴史の舞台に現れるのは、ローマ帝国がブリテン島を植民地にした 1 世紀です。この島はその後の約 1000 年間、元々の原住民に加え、ローマ帝国からの渡来民、さらにヴァイキングやサクソン人、そしてノルマン人など様々な民族集団を迎え入れることとなりますが、その過程でブリテン島南部にできた国家のひとつが「イングランド England」です。それとは別にスコットランドやウェールズ、海を隔てたアイルランドという国がありました。その後の 900 年、この 4 つの地域が戦争や統合、支配、内戦といった形で関係を形成していき、その（現時点での）結果が「グレート・ブリテン及び北部アイルランド連合王国」、つまり今の日本で「イギリス」と称されるものの正体です。

本授業は、生徒さんが各段落を音読して日本語に直し、それに講師が解説を加えるという古典的な「講読」の方式を取っております。しかし、文法的な解説だけでなく、歴史的背景の解説を数多く行うのがこの授業の特徴であります。現在用いているテキストは、英語圏の小学生向けであるため、極めて平易な英文で書かれる反面、歴史叙述としてはあまりに単純でかつ省略が多すぎるため、日本で生まれ育った人間にとっては分かりにくい箇所も少なくありません。そのため、英国史の理解に必要なキリスト教やヨーロッパの国際関係史（特にフランスとの関係）の基本的な事柄を確認するようにしています。

しかしながら見方を変えれば、以上の教科書の欠点があるからこそ、生徒さんはただ漫然と英語を訳すのではなく、どこが自分にとって理解できる（できない）かを意識しながら英文に向き合うという自発的な姿勢を取る



ことにつながるとも言えましょう。生徒さんは英文読解を通じて、世界史に関する問いを自ら提示して、それに対して講師は、「Zoom」（オンライン会議アプリ）の画面共有機能を使って、資料や図像を提示しながら解説していきます。

いまや、外国語を日本語に「直す」だけであれば、DeepL といった高度な機械翻訳で事足りるようになりました。そんな時代にわざわざ外国語を「読む」訓練を行うことに何の意味があるのか。もしそれが、ある言語の単語を一つひとつ機械的に別の言語に置き換える作業を素早く行うことであれば、それは文字通り、無駄な苦行に過ぎないでしょう。

そうではなく、これからの時代で重要なのは、ある言語や文化を一つの意味の体系として身につけることです。言語とはとどのつまり、そこに住む人々が生活のなかで作ってきた意味の集まりのことです。風土や習慣によって一つの単語が指す事物は多かれ少なかれ変わってくる。肉食が盛んな地域であれば、「雄鶏 rooster」と「雌鶏 hen」、「雄牛 bull」と「雌牛 cow」は異なる単語を用いますし、また日本語圏では同じ「水 water」という物質を指す言葉は「お湯 hot water」と「お冷 cold water」のように豊かに存在するわけです。

自分が慣れ親しんだ言葉と、それ以外の言葉を共に学ぶことで、意味の体系がいくつも存在する「リアリティ」を身体で学ぶことは、今後ますます大事になるはずです。一方で強制的にやらされるという感覚をもったままでは、学習は続きませんから、自分の内なる世界に対する欲望をうまく引き出しながら、「手触り」感をもって言語を学んでいくようにしたいですね。この授業ではささやかながらそのお手伝いをさせていただきます。

## 『中学英語 1』

担当 坂本 晃平

こちら『高校英語』と同じく問題を持ち寄っていただき、それを解くという形式で行なっております。その理由は、本講座の受講生それぞれ別の学校に通学している中学1年生2名であり、授業の速度に差が存在するため統一的な講義という形式を取れないためです。加えて、中学校1年次の段階の英語学習の味噌は、微に入り細を穿つ様な雑多な文法規則の内容を講義によって把握することにはなく、極めて基本的な文法事項（動詞の活用、名詞の数、基礎的な平叙文や疑問文の作り方など）について、反復継続的に取り組むことによってそれを骨肉としてゆく、野球の素振りのような訓練にあるからでした。というわけで、「英語の勉強のコツはなんですか」と何度か質問をされましたが、その度ごとに「根性！」というにべもない回答をしてきたわけです。できない問題も、できるようになるまで基礎から積み上げていけば、できるようになるのです。やがて英語に取り組んだ時間がそっくりそのまま英語の実力になります。とはいえただの根性論者だと思われるのも困りますから、ここで役に立つアドバイスをしておくと、英語の学習の時には英語を音読することが重要です。教科書を予習するときには教科書を音読しましょう。問題集に取り組むときには、問題集の例題を音読し、そして自分が解く問題も解きながら音読しましょう。そしてもちろん答え合わせをした後は、間違っていた問題だけでなく、正解した問題ももう一度音読しておきましょう。ただ漫然と手を動かすよりも遥かに効果的です。

ところで、17世紀イングランドの叙事詩人にジョン・ミルトンという人いて、次のように歌っています。

long is the way

And hard, that out of Hell leads up to Light (Paradise Lost, 2. 432)

地獄から

天の光へと昇る道は長く、そして険しい

英語の勉強もこういうものなのでしょうね。いま仮に英語学習が地獄のように、そしてそれが永遠に終わらない苦行のように思われたとしても、その道を抜けた先には栄光が待ち受けているわけです。それにいま頑張れば、長く険しい道のりもその分短くできるでしょう。



## 『中学英語 3』

担当 浅野望



この授業には中学3年生3名が参加しています。授業内容は前半に基礎的な英単語の確認と英作文をおこない、後半はその応用として、英文読解をするというものです。取り扱った英文は News in Levels というウェブサイトにある Robinson Crusoe (ロビンソン・クルーソー) と The Little Prince (星の王子さま) です。また、これらの教材の音声や英検の過去問などを用いてリスニングにも取り組んでいます。学校で学習するのはリーディングが中心になりがちですが、他の3技能(ライティング、リスニング、スピーキング)も鍛えておくと、将来英語で学ぶ場合に心強いと思います。

さて、受講生のうち2人が高校受験を控えています。自分で自分の進路を決めるのはほとんどはじめてででしょうが、じっくり考えて全力で準備してほしいです。私にできることは数少ないですが、残り2ヶ月間、精一杯サポートしようと思います。

## 『中学数学 1』

担当 入角晃太郎

この講座は、現在受講生は一人です。生徒さんが学校の宿題を持ってくることが多いので、私は生徒さんが自力で宿題を解いているところを見守り、適宜解説を加えるというふうな進め方が主になっています。この生徒さんの学校の数学の先生はテストで凝った問題を出すのだそうで、生徒さんの要望により、学校のテストの予想問題を作ったこともありました。生徒さんは、雑談の時間に、よく学校で起こった話を聞かせてくれるので、それを聞くのが楽しいです。

数学は中学から習い始めます。私もまた中学生になって初めて数学を習い、「こんなに面白いものを学校で習ってよいのだろうか」と思ったくらい、数学に夢中になりました。今でもよく覚えているのが、素数が無限個存在することの数学的な証明です。このことをわずかなステップで証明できることに中学一年生の私は感激しました。また、ほかにも、公理から次々と定理が導かれてゆく、ユークリッド幾何学の体系的に心を奪われました(図形問題自体は苦手でしたが)。しかも、そうしたはっとする瞬間が、特別な実験装置があるわけではない、何の変哲もない教室に座っているこの私に訪れることが、当時の私には不思議に思われました。

数学には、「学校で修得すべき科目のなかのひとつ」として済ますにはもったいないくらいの面白さがあると私は思っています。そしてその面白さを味わうためには、特別な実験装置は必要としません。せっかく数学を勉強し始めた生徒さんへ、出来たらこの面白さを少しでも伝えられたらなと思っています。



## 『中学数学 3』

担当 浅野望



「中学英語」と同様のメンバーの、中学3年生3名が来ています。同じ教材に取り組むことが多い英語と異なり、それぞれが別のことを自習するというスタイルです。学校の教材を持ち込んだり、こちらが用意した問題を解いたりしています。

中学3年生の範囲となると、2次方程式の解の公式や三平方の定理、中点連結定理など、学校の授業で天下り式に与えられた定理を応用させて、問題を解くということが多くなります。答えさえ合えば問題ないと思いがちですが、そこはぜひ、なぜその定理が成り立つのかについても考えてほしいです。そのため授業でも、上記のような普段問題を解く際に用いる定理や公式の証明をしています。また、「かず5~6年A」の欄でも述べましたが、問題を解くという意味でも理解を深めるという意味でも、言葉で説明できる能力は重要です。高校のときの数学の先生

が「答案を書くときには式よりも言葉が多くなければならない」と時々言っていたことを思い出します。式をただ羅列して出した答えが正解しているか否かのみこだわるのではなく、自分の思考のプロセスを書き表すことに慣れる機会にしてもらえればと思います。

## 『高校英語 1』

担当 坂本 晃平

目下、高校1年生1名と共にマンツーマン指導の形で英語学習に取り組んでおります。当初、こちらで用意した課題に取り組んできてもらい、毎回の講座でその答案を吟味し解説を行うという形式を想定しておりました。というのも、授業時間中に問題を解く演習形式では、生徒が問題を解いている間、講師が何もしない時間が発生してしまうことになるわけですから。それでは月謝の分の働きをしていないという意識があったわけですね。とはいえ、高校の授業進度や課題量を勘案しつつ受講生本人とも相談した結果、結局は受講生の側で取り組むべき問題（主として和文英訳や英作文でした）を用意し、それを演習形式で解いてゆくという形式に落ち着きました。意外なことに、いざ蓋を開けてみれば演習形式というのも効果的な学習方法だとわかりました。まずもって集中して取り組むことができる環境があり、加えてその環境に一手前味噌で申し訳ないのですが一即応性の高い講師がくっついてくる訳ですから、問題を解きながら、疑問点を言語化（これ自体ひとつの思考訓練です）し、すぐにそれを講師に伝えることができる。講師の側は、その疑問点の内容を即座に把握し、種々の類例を示し比較検討を加えた上で、正しい英語表現への道筋をつけてゆく。その上で生徒がもう一度考える。この反復訓練を、二人三脚で行なってきたわけです。この様に、講座の度に初見の英語の問題、それも英語で表現する問題をテキパキ捌くことが求められる講師の役回りは一またまた手前味噌で本当に申し訳ないのですが一英語（正確には英文学ですが）の専門家である自分に任された、まさに余人を以って代え難い仕事だと思って取り組んでおります。

## 『高校数学 1』

担当 入角 晃太郎

この講座は現在受講生は一人です。生徒さんが学校で使っている教材と一緒に解いています。生徒さん自身がよく疑問を持つタイプということもあり、この講座では、問題を解くなかで用いた定理について、それがなぜ成り立つのかの証明を生徒さんと一緒に考えてゆくことが多いです。

簡単な例を出すと、「二点間の距離の公式」は三平方の定理からすぐに導けます。この導き方を知っておくと、「二点間の距離の公式」が自然なものに思えてくるので、負担のかかる暗記に頼らずに済むのです。なお、三平方の定理は、「正方形が斜めに埋め込まれた正方形」の面積を二通りの求め方で求めることによって証明することができます。このように、ある定理 A の証明に別の定理 B が用いられていたときは、定理 B にも別個に証明を与えることができます。すべての定理は公理から導けることになっているからです。ただし、定理 B の証明に際しては、説明が循環してしまわないように注意する必要があります。定理 A を定理 B で証明したとき、定理 B の証明には定理 A を用いてはならないのです。「AなのはBだからだ」、「BなのはAだからだ」と言うことは、「AなのはAだからだ」と無根拠に言い張っていることに他ならないからです。

また、授業では、使った定理を証明するだけでなく、ある定理が既知の定理の拡張になっているときには、そのことも一緒に確認します。例えば、三平方の定理は、「 $\theta = 90^\circ$  の場合の余弦定理」と見ることができます。更に余弦定理は、ベクトルで表現することもできます。このことを意識しておけば、仮に試験中に余弦定理をど忘れしてしまっても、その場で何とかできるはずです。

この講座では途中の説明や証明をなるべく省略せず、理詰めにも数学に取り組んでいます。生徒さんがどんな疑問を持ってくるかはわからないので、私もその場で考えています。証明を思いついたときの喜びを共有できるので、毎回授業が楽しみです。



## 『高校数学 3』

担当 入角 晃太郎

この講座は、私が受け持つ講座のなかではもっとも古く、いまの生徒さんたちが高校一年生の頃に開講しました。彼らが私の山の学校での初めての生徒さんたちです。発足時は、学校では習わない数学の話を紹介するのがメインの授業をしていましたが、やがて、生徒さんたちが問題を解き、適宜私が解説を入れるという現在のスタイルに落ち着きました。彼らには試行錯誤に付き合わせたことになってしまいましたが、それでも一緒に勉強してくれたことに感謝しています。

今の生徒さんたちも、もうすぐ高校を卒業してそれぞれの道に進むのだなあとと思うと、時の流れを実感します。さて、世の中のたいていの人が数学の勉強をするのは、高校まで、あるいはせいぜい、大学教養課程までで、大人になっても数学と接している人はごくまれです。かく言う私も、理学部を卒業したのちに哲学に転じたので、ふだん数学的対象を扱うことはほとんどありません。それでも私は、数学は中高時代の貴重な時間を割いて勉強するだけの価値があると思います。

世の中には情報が溢れていますが、ある情報が信頼できるものかどうかを、当の情報自身は教えてくれません。それは、「この本に書いてあることは正しい」という本は、そう書かれているというだけの理由では信用することはできないことを考えてみれば明らかです。現実世界の「情報」を教えてくれる歴史や理科の教科書とは異なり、確かに数学の教科書の「情報」は役に立ちにくいでしょう。しかし、数学の教科書を「情報源」として読むこと自体が既に間違っています。数学の教科書を理解しようとするときには、私たちは「情報源」としてテキストを見るのではなく、そこに記された理路を自分の中で再構築するように読む必要があるのです。そして、数学を学ぶ意義は、実はこうしたテキストに対する態度の涵養にあるのであって、「チェバの定理」だとか「余弦定理」だとかを「情報」として摂取するためではないのだ、というのが私の考えです。数学の勉強においては、教科書の中身自体に情報としての価値があるのではなく、それを読もうとする過程で身につく、テキストに対する態度にこそ価値があるのだと思います。

数学を勉強する中高生の皆さんには、教科書に書いてあることを「真に受ける」のではなく、自分の頭で考える力を養ってほしいと思います。

## 『ラテン語初級文法』『ラテン語初級講読』B・C

担当 山下 大吾



初級文法クラスでは、教科書として岩波書店刊田中利光著『ラテン語初歩 改訂版』を用い、2学期24回で全51課に取り組むスケジュールになっております。春学期に開講したクラスでは、先日秋学期までに全ての過程を修了し、4名の方々が見事ゴールに到達されました。冬学期からは来年7月修了予定のクラスが新たに開講され、9名の方々が受講されております。先に進めば進むほど、以前学んだ文法項目が特に指示されることなく現れてきますので、それ

らがしっかり把握されているか復習しながら授業を進めるよう心掛けております。

講読Aクラスでは、2019年2月以来読み続けてきたウェルギリウスの『農耕詩』全4歌を読了するという節目を迎えました。このクラスを前任の前川先生から引き継いで以来、ウェルギリウスの『牧歌』やホラーティウスの『書簡詩』『諷刺詩』を読み進めてきましたが、受講生Cacさんは長年に渡り毎回丹念な予習を欠かさず参加下さいました。深くお礼申し上げます。現在はCavさんTaさんお二方と共に、南江堂刊『ラテン語読本』を教材として、主に第III部収録のカエサル等古典テキストの講読に取り組んでおります。

講読Bクラスでは、秋学期からキケローの『老年について』を冒頭から読み進めております。受講生は現在Mさんお一方で、これまでに24節の、喜劇詩人スターティウスによる詩行「次世代の為に木を植える農夫」の辺りまで進みました。

この作品では、我々もつい当然のこととして老年特有の欠点や短所と捉えてしまう諸々の事例が、実は個々人それぞれの性格に由来するものか、あるいはあらゆる世代の人々に該当するものであると、7、25、65、68節など随処で

繰り返し述べられています。人生のあらゆる負の側面は、年代を問わず全ての人間にいつでも起こりうるという厳然とした事実に変更されていくと共に、これらの言葉は、今を大切に、善く生きる様々々に自覚を促すキケローのメッセージになっているのかも知れません。

## 『ギリシャ語初級』

A (週1コマコース)・B (週2コマコース)

## 『ギリシャ語中級』

## 『ギリシャ語上級』

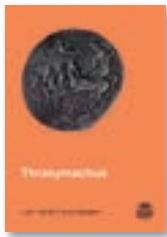
## 『やさしいラテン語入門』

## 『ラテン語初級』

## 『ラテン語中級』

## 『ラテン語上級』

担当 広川直幸



今年度も昨年度と同様、時間割が乱れるなど新型コロナウイルス感染症の影響が多少はあったが、授業は概ね順調に進んでいる。

ギリシャ語は、まず、初級の授業がどちらも教科書の終盤に入った。週二コマコースの方は今年度中に教科書を学び終えることができるかもしれない。週二コマコースを受けている英語が非常に苦手な受講生は、初めは教科書の英語すらよく分からない状態であったが、今では英語よりギリシャ語の方が分かるという妙な状態になっている。この先、講読をする際に最低でも英語が読めなければならないので、英語の学習にも力を入れて欲しい。さて、この授業で教科書に用いている *Thrasymachus* は、私が知る限り最良の教科書ではあるものの、 $-\mu$ 動詞の大半を後回しにしていることが弱点の一つである。不規則な  $-\mu$ 動詞はどれも最重要語彙なので、気を引き締めて最後の登り坂を登り切ってくれることを期待している。次に、中級で読んでいるヘーロドトス (*Barbour, Selections from Herodotus*) は、ずいぶん以前から読んでいるが、現在、ようやく七巻のテルモピュライの戦いまで進んだ。パーバーの選文集は八巻のサラミス海戦までなので、この授業のヘーロドトス講読も終わりが見えてきたと言える。この授業は昨年度まで二週に一回だったのを今年度から毎週一回に変更した。やはり、毎週授業がある方が上達が早い気がする。この授業の受講生はやや音読が苦手なので、予習の際に音読をすることを習慣にしてもらいたい。最後に、上級はエウリーピデースの『バックイ』の最後の部分まで進んだ。この授業では文法的読みを徹底的に実践していて、註釈書の内容はもちろん校訂に関しても文法的観点から妥当であるか否かを逐一検討しながら読み進めているのでかなり時間がかかったが、その甲斐あって受講生も私も得るところが多かった。『バックイ』読了後はソポクレースの『オイディプス王』を読むことになっている。山の学校で『オイディプス王』を読むのは久しぶりであり、また、その間に新しい校註書が出版されたので、今から読むのが楽しみである。

ラテン語はというと、まず、やさしいラテン語入門は、当初の二学期で終えるという予定から少しはみ出してしまったが、三学期目に入って教科書を一通り終えることができた。今学期の残りの時間はカイサルの『ガッリア戦記』を読みながら文法の復習をすることになっている。次に、初級は *Lingua Latina* を順調に学んできた。以前、私のギリシャ語初級を受けた受講生に教えているので、ギリシャ語とラテン語に共通している文法概念の理解度が高く教える側としては大いに助かった。残念なことに、受講生の都合で冬学期は休講になってしまったが、来年の春学期から再開する予定である。そして、中級ではプラウトゥスの『プセウドルス』を読んでいる。この授業では『プセウドルス』の前に『捕虜』を読んだので、プラウトゥスにはある程度慣れてはいるはずなのだが、『プセウドルス』の初めの歌の韻律が非常に厄介で手こずっていて、部分的にはお手上げ状態である。それでもやはりプラウトゥスの劇は生き生きとして面白い。最後に、上級ではホラーティウスの『カルミナ』を読み始めた。私は元来ウェルギリウスやホラーティウス、キケローやセネカといった正統派の古典ラテン文学に対してあまり魅力を感じないので、ホラーティウスも受講生に頼まれた時には気乗りしなかったのだが、以前に比べるとラテン語に対する苦手意識もだいぶ和らいだので、魅力を発見できるのではないかと期待している。

さて、来年度の授業も今年度とあまり変わりはないが、ギリシャ語初級に関しては、今年度で終わったら、新たに受講生を募集する予定である。圧倒的に学習効率が良いので、できれば週二コマコースを受講してもらいたいが、それが無理であるならば、週一コマコースで開講する。また、一年程度で学び終えるギリシャ語とラテン語の文法中心の授業を開講しようかとも考えている。文法中心の授業とは要するに大学で用いているような教科書を用いる

授業のことである。そうしようと思った理由は、私が初級で使っている *Thrasymachus* や *Lingua Latina* の方が圧倒的に総合的語学力が付くのは間違い無いのではあるが、如何せん学び終えるのに二年程度かかるし、日本で出版されていて大学などで用いられている教科書の方が学びやすいという人もいるかもしれないと思ったからである。文法中心の授業はリモート対応にするつもりである。興味のある方は是非問い合わせさせていただきたい。

## 『ギリシャ語初級文法』『ギリシャ語初級講読』A

担当 山下大吾



初級文法クラスは、春学期 4 月から 8 名の受講生を迎えて開講致しました。教科書として岩波書店刊田中美知太郎・松平千秋著『ギリシア語入門 新装版』を用い、3 学期 36 回の授業で全 70 課と『クリトーン』など講読用テキスト 2 編に全て取り組むスケジュールで、2022 年 3 月の修了を目指し順調に過程が進行しております。授業は一コマで教科書 2 課分に取り組み、希文和訳問題を受講生に答えて頂く形式です。和文希訳問題には時間の関係から授業内では取り組まず、当方で作成した試訳を提供して、各自任意に確認頂く形を採っております。

講読クラスでは、引き続きホメロスの叙事詩に取り組んでいます。これまでに『イーリアス』1 歌 (2019 年 9 月～2020 年 10 月)、『オデュッセイア』1 歌 (2020 年 11 月～2021 年 10 月) を読了しました。現在は、老王プリアモスが決死の覚悟で息子ヘクトールの遺体を引き取りにアキレウスの陣屋を訪れる、「ヘクトール贖いの段」として古来名高い『イーリアス』の 24 歌を読み進めています。受講生は開講以来継続受講されている Cu さんに加え、春学期から新たに T さんと Cav さんが参加下さり、各自それぞれの質問や感想などが交わされる一層賑やかな授業となりました。文法的精読を旨に、ホメロス独特の形態や表現、ヘクサメトロスの韻律にも注意しながら複数の註釈を参照しつつ、一回の授業で 10 数行から 20 行弱というペースで進んでおります。

## 『ギリシャ語初級講読』B

担当 竹下哲文



昨年春学期から開始したギリシャ語初級講読 B では、引き続き A.E. Hillard & C.G. Botting, *Elementary Greek Translation*, London: Duckworth, 1982 [orig. publ. London: Rivingtons, 1923] を受講生 1 名と共に読み進めています。本書は前 400 年までの古代ギリシャの歴史を題材にした 55 の短いテキストから成っており、本稿執筆時点では、プラタイアイの戦いを扱った 32 課を読み終えたところです。

また、「読解と併せて作文もしてみたい」受講生の希望もあり、学期の途中から同じ著者による *Elementary Greek Exercises*, London: Duckworth, 1981 も併用しています。本書は、英語からギリシャ語への平易な短文の翻訳問題を多数収録しており、作文によく用いられる North & Hillard の *Greek Prose Composition* の前段階にあたるものと位置づけられます。実際にギリシャ語の単語を自ら変化させることで、読解のときの語形の分析とは逆の方向から、文法知識の一層の定着を図っています。こちらは、本稿執筆時点では、第 15 課に入ったところです。

授業は Zoom を用いた遠隔実施という形態をとっています。通常の対面授業とは勝手が異なり当初は戸惑う面も少なくありませんでしたが、慣れてくると画面共有を用いて色々な資料を示しながら授業を行うことができるなど便利な点もあることがわかってきました。関心のある方は一度お問い合わせください。

## 『現代ギリシア語初級文法』1・2

担当 福田耕佑

今年度の授業は半分はギリシアのテッサロニキから、半分は京都から行いました。今年は幸いなことに新しいクラスがもう一つ始まり、新しく現代ギリシア語を学び始める方が増えたことをとても嬉しく思いました。ご存知の通り (?), 現代ギリシア語は古代ギリシア語と共通の部分が多くあるのですが、もちろん時代を経る中で変化したところもあり、本授業ではなるべく現代ギリシア語の中にどのように古代ギリシア語が生きているのかについて講義の中で触れるように努めました。

ところで個人的な話ですが、本講座担当者の福田はギリシアにいる間に研究の他にギリシアの料理を作ってみたり、伝統的な楽器を学んでみました。楽器の名前はギリシア語で「ポンディアキ・リラ」(ποντιακή λύρα)、トルコ語で「ケメンチェ」(Kemençe)と呼ばれています。古代語にせよ現代語にせよギリシア語を初めて学んだ時はえらく日本語と異なるなあと思いましたが、料理に関しても調味料や食材はもちろん日本と同じものではなく、そして楽器に関しても、音階からして「ウサク」や「ヒジャズ」という摩訶不思議なもので、もはやドレミファソラシドでさえありませんでした。



鴨川にて

言葉の学びにしても楽器の学びにしても、遅々たる歩みではありますが、いつでも厚さの違う様々な壁にぶち当たります。よく「壁を乗り越える」と言いますが、実際には「壁をなかったことにしてスルー」したり「迂回」したり、果ては「火薬で爆破」したりしながらどうにかこうにか歩き続けていると言ったところですよ。お世辞だと分かっている

でも「ギリシア語がお上手ですね」や「弦楽器を習うのが初めてだなんて信じられない」と言われればとても嬉しく、「全然上手じゃないね」と言われると真実だとは知りつつも心は深く傷ついてしまいます。私に楽器を与えて教授して下さった先生は、死ぬまでずっと練習と修行であり、共に学び続けていくのだとおっしゃいました。

そういうわけで、学ぶ者として先生や生徒という役割があるのもそうなのかもしれませんが、サービス業に従事させていただいているということ以上に、共に学び切磋琢磨し合う機会が与えられているんだと実感することとなった一年になりました。できる限り互いに励まし合い、頭と体でもって、あの不思議なギリシアというものを学び続けていきたいと思いました。



ゴス・ペトリディス (私の師匠の師匠)

## 『イタリア語入門』『イタリア語講読』

担当 柱本 元彦

現在受講生は二名、対面とリモートに分かれていて、それなりに慣れてはきましたが、いろいろと至らないところもあり申しわけなく思っています。授業のほうは秋学期の前半は息抜き？にレオバルディの詩を読みました。後半からは本道の散文に戻り（こちらの方が息抜きのようですが）、五年ほど前にもとりあげたナポリの作家、ラッファエーレ・ラ・カプリアの『四つの愛の物語 4 storie d'amore』を読んでいます。前回は二つの物語で切り上げたのですが今回は四つとも読もうと思います。今年百歳のラ・カプリアはいまだ現役（おそらく）、文学賞のキャリア部門を総なめにしている大長老です。昔から戯曲の翻訳を多く手がけ、映画脚本家としても有名で（日本でもよく知られている作品にロージ監督の『エボリ』があります）少し毛色が変わっています。四十歳頃に難解な長編 "Ferito a morte"（ストレーガ賞受賞）を発表した頃は、イタリアのジョイスと呼ばれていました。この『四つの愛の物語』という物語的エッセーは八十五歳のときの文章です。ラ・カプリアは永遠に失われた過去のナポリを長らく嘆いていましたが、年を経てどうやら自在の境地に達したらしく、戯れるがごとく気のおもむくまま書き散らしているようです。イラスト作家とのコラボ本になっていて易しく読めますが、それなりに味わいがあり（クセがあり）講読初級のテキストとしては手頃なものでしょう。でも易しいはずなのに鋭い質問が向けられるとしばし思い悩み、講師があらためて学ぶところもあるのです（テキストのおかげというよりは受講生のおかげですね）。



## 『0から1へのフランス語入門』A・B

### 『フランス語（読解）』

担当 谷田利文



「0から1へのフランス語入門A」では、練習問題を多く解いて、記憶の定着を図りたいという要望から、文法事項を確認してから練習問題を解くことをメインにしています。テキストの三分の二ほどを終え、冬学期で一通り終わられるのではと思っています。

Bクラスでは、春・秋の二学期でちょうど文法事項が一通り終わりました。冬学期からは要望により、『星の王子さま *Le petit prince*』を読み始めます。子供向けと思われるがちですが、序文から関係代名詞、複合過去、半過去、最上級などが出てくるので、文法の復習にはちょうどいいテキストだと改めて感じています。文法事項を確認しながらゆっくり読んでいく予定です。

「フランス語（読解）」では、要望から仏作文をメインに扱い、クリス・ベルアド『フランス語作文ラボ——ニュアンスで使いわけるための添削教室』（白水社、2018年）の実践問題に毎回

1課分ずつ取り組んでもらいました。また、作文する上でポイントとなる冠詞について、事前に関連書を読み、質疑応答により理解を深めることも並行して行っています。扱った本は、一川周史『新・冠詞抜きでフランス語はわからない』（駿河台出版社、2007年）、小田涼『中級フランス語 冠詞の謎を解く』（白水社、2019年）です。冠詞の選択は、冠詞が用いられる具体的な状況によって、それが既知か未知かが決まるため、整理が難しいですが、中級・上級へとレベルを上げていくためには避けて通れない問題だと思いますので、今後も取り組んでいきたいと考えています。

## 『フランス語講読』A・B

担当 渡辺洋平

フランス語講読の授業は、今年から zoom によるオンラインでの開講となり、新たな受講生とともに再出発しました。最初のガイダンスでのやりとりを元に、Aクラスではアンリ・ベルクソンの論文講演集『思考と動き (*La pensée et le mouvant*)』（1934）から「可能的なもの と 実在的なもの (*Le possible et le réel*)」を、Bクラスではロマン・プエルトラスの『IKEA のダンスに閉じこめられたサドゥーの奇想天外な旅 (*L'extraordinaire voyage du fakir qui était resté coincé dans une armoire Ikea*)』（2013）とフランソワ・ミッテランの書簡集『アンヌへの手紙 (*Lettres à Anne*)』（2016）をテキストとしました。



Aクラスで読んだ「可能的なもの と 実在的なもの」は原書で20ページ弱とベルクソンの文章の中でも短く、そのせいもあってか特に終盤はやや抽象的な印象でしたが、順調に読み進めることができ、すでに読了しました。短いながらもベルクソンの思想的な特徴は垣間見ることができたのではないかと思います。フランス語の難易度としても簡単というわけではありませんが、極度に難解という箇所もないので、まずは良い選択だったのではないかと思います。冬学期からは、ジャン＝ポール・サルトルの『実存主義はヒューマニズムである』（1946）を読む予定です。本書はサルトルの著作の中でもっとも広く読まれたと言われており、良くも悪くもサルトルの一般的なイメージを形成した講演録です。「実存は本質に先立つ」といった私自身も高校時代の倫理で教わったようなフレーズがでているのも本書です。

ちなみに、秋学期の最後の2回ほど、マルセル・ブルーストの『サント・ブーヴに反論する』という草稿を読んだのですが、こちらもなかなかおもしろく、サルトルが終わったらこちらを読んでみようかと思案しているところです。



Bクラスの『IKEA のダンスに閉じこめられたサドゥーの奇想天外な旅』はフランスの人気小説で、日本も含めすでに世界中で翻訳がなされており、2018年には映画も制作されています。軽快なトーンで物語がすすんで行くので、文章としての難易度は高くありませんが、地の文に登場人物のセリフや思考が埋め込まれるという、いわゆる「自由間接語法」が多用されており、そこに慣れるのに少しコツがいるといった感じでしょうか。また著者のユーモアを感じるとともにフランス語への慣れが必要かもしれません。





一方の『アンヌへの手紙』は、フランスの第 21 代大統領フランソワ・ミッテランが恋人（不倫相手）へ宛てた膨大な手紙です。愛にあふれるとともに非常に教養豊かな文章で、家族も仕事もあるはずなのに一体いつこんなに手紙を書いていたのだろうかと思ってしまうのですが、ミッテランという人物の大きさを感じられます。文章も流麗で美文だと思います。その一方で、やはり元はプライベートな手紙なので、他人が読んで何の話をしているのかが分からない箇所もあり、きちんと読もうとするとなかなか大変です。大統領の不倫というある意味ではスキャンダラスな出来事にも寛容なフランスの国民性は、年々狭量になっているように感じられる日本国民も見習ってほしいものです。

さて、冬学期以降、A クラスは上述のようにサトルルを読む予定ですが、B クラスの方は受講生の仕事の都合で一旦お休みとなります。これまでのテキストで再開するのか、あるいは新しいテキストで新たに開講するのかがこの原稿を書いている時点では決まっていません。少しでも興味がおありの方は、まずはお気軽にお問い合わせいただければと思います。個人的には少し古めの文学作品（ユゴー、スタンダール、ゾラなど）か、あるいはルソーなどを読んでみようかという気持ちもありますが、もし何か読んでみたいテキストがあれば、そちらで開講するということが可能かと思います。



## 『ドイツ語初級』『ドイツ語講読』

担当 吉川 弘晃

このクラスでは、生徒さんのレベルや要望に合わせて、内容を設定していますが、様々な種類のドイツ語の文章を正しく読めるようになるという目的は一貫しております（初級・講読の各クラスについてはホームページの説明をご参照ください）。

この授業では「読解力」の習得に力点を置いています。それは「作文力」「聴解力」「会話力」と連動しているため、結局のところ、これら 4 つの力を総合的に鍛えていくのは、どの言葉を学ぶにせよ最も大事です。そして何よりも全ての基礎体力になるのが語彙力です。特にドイツ語は、標準レベルの言語運用で必要とされる語彙数が、他の西欧諸語と比べた場合、圧倒的に多いと言われております（フランス語：2000 語、英語：3000 語、ドイツ語 5000 語）。ドイツ語は初級から中級にレベルアップするのが難しいのは、恐らくは基礎文法をせっかく習得しても、膨大な語彙が第二の壁として立ちはだかっているからでしょう。そのため授業では、ドイツ語の語彙に親しみ、それらを効率よく頭に入れるコツに触れるようにしています。今回は、皆さまの日々のドイツ語学習に役立つ教材を紹介しましょう。

### (1) 橋本政義『会話と作文に役立つドイツ語定型表現 365』三修社、2016 年

ドイツ語で頻繁に使われる熟語表現を厳選したものの、「zum Abschluss 最後に」や「darüber hinaus その上」といった簡単なものから、「et4 auf die leichte Schulter nehmen ～を軽く考える」などの少しこなれたものまで載っており、各表現には 4 つの例文が用意されています。付属 CD の音声ファイル (mp3 形式) を携帯端末に入れたり、冒頭数頁の表現一覧をコピーして持ち歩けば、仕事の合間にも学習できるでしょう。



### (2) Friedrich Clamer/ Erhard G. Heilmann, Übungsgrammatik für die Grundstufe(4 Aufl.), Meckenheim: Liebaug-Dartmann, 2007.

ドイツ語の初級から中級者（欧州基準 A2 ～ B2）向けの練習用ドリル。問題はほぼ穴埋め形式か書き換え形式で、真面目にこなそうとするとすれば骨が折れるが、その分、実力は身につくでしょう。本書は助動詞や形容詞、受動態といった単元別に構成され、また分離動詞の前つづりや動詞のコロケーションといった語彙に関する項目も多いので、苦手な分野を集中的に勉強する際にも便利です。Helmut Röller による解答編（Lösungen）が別売りされているので、問題編と一緒に入手することをお勧めします（いずれもオンラインで購入可能）。



### (3) Deutsche Welle ” TOP-THEMA ” <https://dw.com/>

「ドイツの波 Deutsche Welle」はドイツ連邦政府が各国語で提供している放送事業です。いわば NHK World News のようなものと考えてください。そのドイツ語版放送は、ドイツ語学習者のためにレベル別に多くの教材を提供していますが、特にお勧めするのが「TOP-THEMA」です。最近の様々なトピックを取り上げた 2～3 分ほどの動画に、スクリプトだけでなく、音声ファイルや主要な表現、そして内容に関する問題が付属しています（この問題はドイツ政府公式の語学資格 Goethe-Zertifikat のリスニング対策になります）。これを真面目にこなすだけで、4 つの力を総合的に（しかも無料で）身につけることができます。

以上、お勧めできる教材を 3 つほど紹介いたしました。何より大事なのは、自分の目標やレベルに合わせ、可能な限りで学習を続けていくことです。体調を崩したり、気がなくなったりしたら元も子もありませんから、自分の学びの欲望を刺激するための仕掛けを意識しながら学習を続けてみてください。

## 『韓国語初級』

カク ミンソク  
担当 郭 旻錫



山の学校ではじめて韓国語の講座を始めました。韓国語の文字（ハングルといいます）の形や発音を習うことから始めて、韓国語の基礎的な文法を一通り最後まで目を通すことができました。今年（2021年）の4月からのクラスだったので、8か月ほどの短い期間でしたが、日本語と色んな面で非常に似ている韓国語だからこそ可能だったと思います。

韓国語が面白いのは、日本と一番近い隣国の言葉として、日本語との相互影響関係で形成されてきた言葉だということです。韓国語を習いながら、日本語に対する理解も深めつつ、日本語との類似性や相違点も確認できたのは、とても楽しい作業だったと思います。

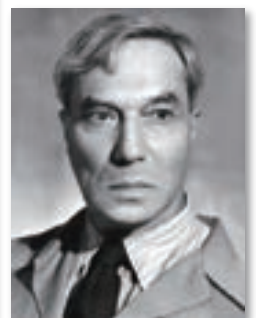
毎回授業のはじめには、いままで学んだことを復習してみても生じた疑問点を解決する時間を設けました。言語は完全に論理的にできているものではなく、また深めればどこまでも深められるので、真剣に考えれば必ず疑問が生じるはず。その疑問点を他の受講生の方々と共有しながら、一緒に考えることができたのは、非常に爽やかな作業だったと思います。それは教える立場からしても、もっともエキサイティングな時間でありましたが、たくさんの質問を積極的に投げかけてくださった受講生の方々に感謝の言葉を申し上げたいと思います。

## 『ロシア語講読』

担当 山下大吾

当クラスで現在、ロシア詩の講読に取り組んでおります。受講生はこのクラス開講以来継続して受講されている T さんに加え、しばらく休会されていた N さんが春学期から復帰されお二方となり、読後の感想や質問などの飛び交う以前の活気あふれる雰囲気に戻って参りました。文法的読解のみならず、ヤンプやアナペストといった韻律や男性韻、女性韻の脚韻など、詩ならではの特性にも十分気を配りながら講読を続けております。

2021年1月から取り組み始めた Julia Titus 編集のロシア詩読本は9月までに読了し、現在は N さんのリクエストで、小説『ドクトル・ジヴァゴ』の作者としても知られるパステルナークの詩を読み進めています。底本は Dimitri Obolensky 編纂のロシア詩選集とし、この先ヴァチャスラフ・イワノフやマンデリシュタムなど、上掲 Titus 編の読本に未収録の、主に 20 世紀の詩人を取り出して講読の予定です。また T さんのリクエストで、息子アンドレイが『惑星ソラリス』などの映画監督として知られる、アルセーニ・タルコフスキイの作品にも取り組む予定になっております。文法を一通り学習された方でしたら参加可能ですので、ロシア詩のみならずロシア語・ロシア文学に興味を抱かれる方々のご参加をお待ち申し上げます。



## 『高校英語 2』 『高校数学 2』 『英語講読』 C

山の学校ゼミ 『調査研究』

担当 浅野 直樹

どのクラスにも共通して言えることとして、授業内容そのものよりも、その周辺で交わされる何気ない会話が強く印象に残るように感じています。

「高校英語 2」クラスでは、本文中の空所を補充する大学入試の過去問を解いているときに、受講生が「現代文と同じように選択肢を見る前に自分の中で候補を出しておいたほうがよいのではないか」と言い出しました。おそらくこの問題についての私とのやり取りに触発されてこの発言が引き出されたのでしょう。選択肢を見る前に候補を出しておくという方針に強く賛成すると伝えました。

「高校数学 2」クラスでも、三角関数の後半でたくさん登場する公式は全部加法定理をもとにしている、ベクトルの引き算は逆向きにして足し算にして別の地点を経由して目的地に向かうのだと考えるとわかりやすい、データを中央値で2つに分けたときの前半の中央値が第一四分位であり後半の中央値が第三四分位だ（中央値は言ってみれば第二四分位だ）、といったやり取りをしたことを覚えています。



「英語講読 C」クラスでは、英語の本文の解釈もさることながら、「これは日本に当てはめると〇〇みたいなものだ」といったコメントが理解に資することができたのではないかと感じております。

調査研究クラスは、昨年度末に発表を終えて一からの次の着想を探り始めたので、授業時間全体が周辺の会話のようにも感じられました。幅広くアイデアを出し合っ、これがおもしろそうじゃないか、こう考えると行き詰まってしまう、などと話し合いました。

本はもちろん、インターネット上にもたくさんの有用なコンテンツがありますが、特定の題材をもとにして自由に語り合える場は意外と少ないのかもしれませんが、山の学校はそのような場であると私は考えています。

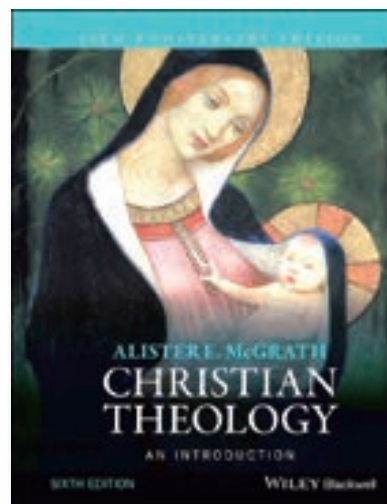


## 『教養英語』

担当 塩川 礼佳

2021年度の頭から「教養英語」と冠して、講読の授業を担当してきました。幸い、熱心な受講生の方々にも恵まれ、現在、2名の方に継続受講していただいております。テキストは、Alister McGrath, *Christian Theology*, 6th ed. を用いています。邦訳が存在する文献ですが、訳出されている版が古いため、原語で挑戦する値打ちはなお十分だと思います。実際、受講生の方から「英語の文章を読む習慣が身についた」「今までキリスト教についてちゃんと勉強したことがなかったので面白い」と嬉しい言葉をいただいております。やさしい英語で、キリスト教の教養を身に着けられることが本講座のウリです。

つい先日も、原著に触れることの意義を実感させられる出来事がありました。“Operative grace”と“Cooperative grace”という2つの概念の訳語を検討した時のことです。マクグラスの説明によれば、前者は、神が人間側の助けなしに罪びとの回心をもたらすことを、後者は、回心後、神と人間がともに（collaborate）ことを指しています。マクグラスの説明をきい



た後では、この2つの概念が自らその対照的な内容を語っているように思えてきます。operative と co-operative という2つの単語を見比べてみましょう。co- という接頭辞は「共同」という意味で、operative は、恩恵がはたらいっていることを言い表していると理解してみてください。授業では、受講生の方の質問をきっかけに、この2つの言葉が対比されていることをはっきり伝えられる訳語は何だろうとあれこれ案を出し合ってみました。

そこで、気になって邦訳(614頁)を参照してみると、これらの訳語は、<効力ある恩恵>と<協同する恩恵>とされています(後者については「協働する」と訳したかったのだと信じてますが)。教科書ですから、有名な訳語をしっかりと教えることは大切です。専門家同士であれば、この訳語で十分話が通じるでしょう。しかし、これからキリスト教について勉強してみたい人にとっては、不親切にも思えます。英語だと、マクグラスの説明がずっと頭に入ってくるのに対し、邦訳では、まるでバラバラの概念に思えますから(効力のない恩恵があるのか?!という無用の混乱も懸念されます)。そうであれば、どんな訳語がいいのでしょうか。これが正解!と納得できる訳語を思いつくには少し苦労が必要そうですね。皆さんなら、どう訳しますか。最終的に邦訳と同じ訳語を選んでも構いません。誰かがつくった訳語を丸暗記するのではなく、この単語にはこちらの言葉がふさわしいか、それともあちらの言葉の方が似合うだろうかと自分で頭を捻ってみる体験が大切だと信じます。

翻訳は、思想の学びの根幹です。本講座では、拙いながら、そういう基本的なことをお伝えできればと思っています。何より、自分で外国語と格闘した経験は、いつか、あなたを本当の学びへと誘ってくれるはずです。例えば、こんな疑問が、旅の切符になるかもしれません。そもそも、これらの概念は、マクグラスが言うほど、対比的に用いられてきたのでしょうか。もし、最初からそうでないのだとすれば、その用法は、いつ頃成立したのでしょうか。本講座の枠を飛び越え、思想の学びはどこまでも広がってゆきます。

さて、本講座では、春学期に、神の創造について、秋学期には、被造物としての人間について勉強しました。冬学期は、人間の救済について扱います。小難しい表題にウツと思われた方もいるかもしれませんが、ご安心を。マクグラスにかかれば楽しく学べるのだから不思議なものです。流麗な英文と明晰な解説。キリスト教についてあまり勉強したことがない人にこそ、この面白さを体験していただきたいところです。また、文法や単語の説明に時間を割く基礎的な講座ですから、英語を学び直したい方や意欲的な高校生の方にも最適ですよ。どうぞ気軽に仲間に加わってください。

## 『英語講読』 A ディケンズ『ボズのスケッチ』

担当 坂本 晃平



本講座で読んでいる『ボズのスケッチ』には、実は‘Illustrative of Everyday Life and Everyday People’というサブタイトルがついていて、19世紀のロンドンでディケンズが日々の生活の中でよく会っていたであろう人々を生き生きと描き出しています。面白いのは、そうした人々を現代の日本でもみることができることでしょうか。これまで読んできた中でも、人が多いはずの大都会で人間関係から疎外され、毎日の生活を機械的に繰り返しながら孤独に生きる中流階級の労働者、ハレの日が来れば温かい心を取り戻し、日頃の不和を乗り越えて共に祝う家族、パーティーでお偉いさんをひたすらヨイショする僕みたいな野心家の青年、カノジョさんにちょっかい出されて喧嘩を売られるものの返り討ちにあう僕の友達みたいなカレシ君、テレビの某コメンテーターみたいに論破芸を売りにしているものの肝心の中身はすっからかんの虚しい人間、エトセトラエトセトラ・・・が登場してきました。彼らの生き様が、時にはカミソリの

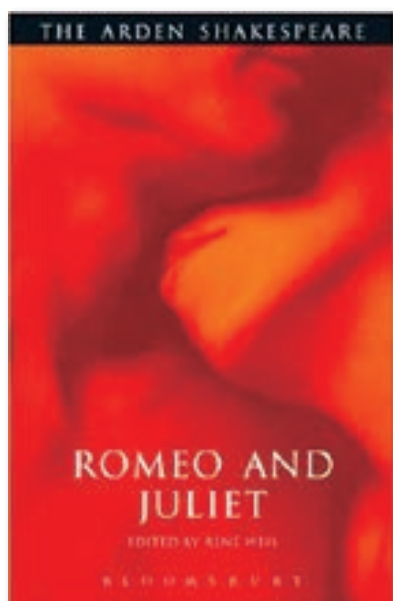
様な鋭さを持つ、時には暖炉の様な暖かさを持つ筆致で21世紀の日本にも蘇ってくるわけです。ユーモアとペーソスとが絶妙に混じり合い、読んでいて楽しいことは折り紙付き。ただし英語が非常に晦渋である上に、たった一つの翻訳が誤訳だらけなのが辛いところ。例えば、Characters というセクションの第1章冒頭には、

It is strange with how little notice, good, bad, or indifferent, a man may live and die in London.

とあるのですが、これを正確に解釈できる人は世の中英語業者多しといえどもそうそういないのではないのでしょうか。とはいえ、丁寧で楽しい解説を心がけておりますので、目から鱗&口からタラコです。道場破り、待っています。

## 『英語講読』 B シェイクスピア『ロミオとジュリエット』

担当 坂本 晃平



こちらの講座は先の秋学期に開始したものの、種々の事情が重なったために100行程度読み進めたまま一旦中止して新規開講待ちという形になっております(12月7日現在)。というわけで、この場をお借りして本講座の宣伝をさせていただくと、まずもって『ロミジュリ』の悲恋はルネサンスに書かれて今なおその恋の魔力を失っていない普遍性を持った作品なのです。ロマンチックラブ+悲劇=正義というわけです。また文体面でも恋愛詩(特にソネット)の伝統を強く意識していてとても煌びやか。韻文ではなく散文で書かれたところもとてもコミカル。とはいえいかんせん下品にすぎる部分もあるのが玉に瑕と感ぜられる向きもあるかもしれませんが……。なんにせよ、死ぬまでに読むべき英語の作品No.1といっても過言ではありません。ぜひぜひお越しくください。(『ソネット』のクラスとの運営方法の違いについて付記しておく、『ソネット』の方が講義形式に近く、主として講師が今回『山びこ通信』に載せたような内容の解説を進めてゆくのに対し、『ロミジュリ』は演習形式で進め、受講生の方に訳読をお願いし講師は適宜コメントをするという形式を採ります。)

## 『英語で味わうシェイクスピアのソネット』

担当 坂本 晃平

詩人の内的感動がそれに相応しい言葉の器に載せられたのなら、まさにその時そこに詩神が宿り、詩が詩たれる必然が生まれます。もっと砕けた言い方をすれば、表現したい気持ち(内容)にふさわしい言葉の工夫(形式)をした作品が詩的な詩だというわけです。他ならぬこの信念を胸に、ソネットという短い詩の小宇宙をめぐって詩神(アポロでもミューズでもお好みで)の隠れ家にお邪魔するのがこちらのクラス。

さて、いつもどういってお話をしているのかの参考のため、先の秋学期にも扱ったソネット35番を題材に詩神の隠れ家を探してみましよう。おやおや、どうやらこの詩では語り手(=「私」)の恋人の浮気が発覚したようです。これは修羅場を期待したいところ……ですが、彼はむしろ

For to thy sensual fault I bring in sense –  
Thy adverse party is thy advocate –  
And 'gainst myself a lawful plea commence.  
Such civil war is in my love and hate,  
That I an accessory needs must be  
To that sweet thief which sourly robs from me. (35. 9-14)

だって、お前の官能の罪に私は理性を持ち込んで—  
お前の敵対者であったはずが今やお前の代弁者—  
自分で自分に訴訟を始めてしまうのです。  
私の大好きと大嫌いの間にはこんなにも激しい内乱が起こるから、  
私は共犯者にならずにはおけないのです、  
私から酸っぱく心を奪っていく甘い盗人の。



と、なおも嫌いにはなりきれない、「大好きで大嫌い」(love and hate) という—古代ローマの詩人カトゥルスの Odi et amo を踏まえた—二律背反した心情を歌っています。よく見てみるとこのように矛盾した表現は上の6行からたくさん見つかります。例えば、冒頭には sensual (官能の) と sense (理性)。次に adverse (敵対する) と advocate (代弁者)。最後の行の sweet (甘い) と sourly (酸っぱく)—この副詞の言わんとするところは、むごたらしいやり方ということ—というのは、日本語で恋を甘酸っぱいというのと同じですね。これらの自家撞着したあり様は、'gainst myself (自

分で自分に反抗して) という表現にも通じるでしょう。

このように、35番は二律背反性をことさら強調し、それで以って「大好きで大嫌い」という引き裂かれた思いを叫んでいるのです。ここまでのこのソネットの内容、つまりは表現したい気持ちについてのお話でした。ここからはその思いを表現するために言葉にどのような工夫が施されているのか、つまり形式面に目を向けてみます。そう、ポエム(詩)に施すライム(脚韻)のお話です。ここで行末の単語を抜き出してみると、sense-advocate-commence-hate-be-me ですから、脚韻は a-b-a-b-c-c の形で書かれているのがわかります。つまり4+2のユニットです。しかしながら、この6行でピリオドが打たれている場所はといえば、それぞれ commence と me の後に一つずつあるわけですね。センテンスという観点からは、3+3のユニットになっているのです。要するに、脚韻の形式による区切り方とセンテンスの区切りとの間に矛盾が生じているということになります。

これでピンと来た方も多いでしょう。つまり、「大好きで大嫌い」という相矛盾する感情を表現するための言葉という器、まさにその器自体が、二つの相矛盾する区切り方によって分たれることで、引き裂かれた感情との相似形を成しているわけです。言葉という感情の器すらもが引き裂かれることによって、この詩の言わんとする「大好きで大嫌い」という感情が真に迫ったものとなります。かくして、ソネット35番は詩としての必然を手に入れることができました。この亀裂こそが、詩神の住み給う溪谷であったと言えるでしょう。

さて、毎回の講座では形式的特徴と表現された内容の有機的關係について、以上の様な分析をさまざまな角度から行なっております。12月7日現在、ソネットの42番まで終えていますから、そろそろ55番などがある中盤の名場面に差し掛かっていく頃合いですね。

# 『漢文入門』『漢文講読Ⅰ』『漢文講読Ⅱ』

## 『東洋古典を読む』

担当 齋藤 賢

### ①「漢文入門」

本講座は漢文の基礎文法を習得し、自力で返り点のついた文章を読めるようになることを目的とした授業です。授業の計画としては、まず返り点など訓読の基礎や漢文の基本的構造を解説し、続いて漢文の重要な句法を解説し、その後は返り点のついた文章に挑戦していくことになります。テキストとしては小川環樹・西田太一郎『漢文入門』などを中心に、受講生の関心に沿いながら適宜選んでいきます。



漢文と言えば、教科書にのっているような教訓めいた諺や、漢字ばかりの堅苦しいイメージを抱かれる方もおられるかもしれません。しかし、実際には人の胸を打つ物語や、好奇心をそそられる逸話に満ちており、漢文を学び、理解を深めることで世界は大きく広がるでしょう。



万里の長城（慕田峪）講師撮影。

### ②「漢文講読Ⅰ」

2021年度の秋学期より、漢文に慣れ親しんでもらうことを目的として、志怪小説など怪しい話を中心として、基本的に比較的短い話を選んで読み進めています。

これまでは、六朝時代の志怪である『搜神記』『搜神後記』『拾遺記』から数篇を選んで読み終え、その後は受講生の希望にそって『世説新語』『呂氏春秋』『古神話選釋』などから短編の説話を選び、読了しました。志怪小説には、夜になると頭だけ分離して飛んでいく召使や、狐に誑かされた男、病気の母を看病する三兄弟のもとに突如として出現する生首など、怪しく不思議で、時に恐ろしい話が満載です。現代の怪奇小説にも通じるようなこれらの話は今も読者の興味をそそるものでしょう。

秋学期から冬学期にかけては、人と幽霊の恋物語である「金鳳釵」を読んでいます。明・瞿佑の『剪灯新話』にみえるこの話は、幼い頃に金鳳釵（金の鳳凰をあしらった簪）を証に結婚の契りを交わした二人の男女が、親の事情で離れ離れとなってしまう、そのうち女性は病気で夭折するけれども、彼女の妹と名乗る人物が現れて、男性と恋に落ち…というあらすじで、男女の情を悲しくかつ美しく描き出しており、単なる怪奇小説とは一味違ったものとなっています。

また、中国の志怪小説は日本のお化けや妖怪にも影響を与えているようで、受講生のかたからは読んだテキストと似た話が日本にもあるとの声をよくいただいています。志怪小説を読むかたわら、日本の物語などと比較することも興味深く、また意義のあることだと思います。

### ③「漢文講読Ⅱ」

2021年度の春学期より、『史記會注考證』をテキストに読み進めています。司馬遷の手になる『史記』の名は聞いたことがあるかたも多いかと思いますが、瀧川亀太郎博士の手になる『史記會注考證』にはあまりなじみがないかもしれません。本書は『史記』本文に注釈のついた形式となっており、『史記』の三家注と称される南朝宋・

裴駰の「集解」、唐・司馬貞の「索隱」、及び唐・張守節の「正義」に加えて、瀧川博士が中日の学者の説や自身の見解をまとめた「考證」が附されています。

現在は戦国時代の人物の列伝を中心に授業を進めており、春学期に呂不韋列伝、秋学期に魏公子列伝、そして冬学期には平原君虞卿列伝をテキストに採用しました。一介の商人から秦国の大臣にまで登りつめたにもかかわらず秦王にその権勢を疎まれ、最後には毒酒を飲んで自殺した呂不韋。義侠心に富み、援軍を率いて秦に攻囲された趙を救い、また諸侯の兵を率いて当時圧倒的勢力を誇っていた秦軍を函谷関以西に封殺するなど、赫赫たる功績をあげるも、讒言のために憂いに沈んで病死した信陵君。『史記』の記す人々の多くはこのように優れた才能を持ちながらも悲愴な運命を辿っています。しかし、だからこそ彼らの鮮烈な生きざまは読者の心に深い印象を残すのだと、私は感じています。また、司馬遷の妙筆が描く人物たちは、2000年以上たった今なお色褪せず、読者の眼前に彷彿として現れるかのようです。さらに、『史記』理解の助けとして、関連する文献や考古学的遺物などもご紹介しつつ、古代中国がイメージできるような授業を目指します。

なお、本授業は丁寧な解説を心がけていますので、初心者のかたでも不安に思われる必要はありません。受講生からは授業を受けるなかでだんだんと読めるようになってきた、という嬉しい声もいただいています。



#### ④「東洋古典を読む」

2021年度春学期より担当している本授業は、長らく読み継がれてきた中国の古典を読むことを趣旨としています。春・秋学期は清・盧弼の『三国志集解』や『三国演義』をテキストに選び、『三国志集解』では曹操の伝記である武帝紀を、『三国演義』では桃園結義や官渡の戦いの場面を読み進めました。『三国志』は古来簡潔な名文として知られており、『三国演義』は日本でも人気を博した古典小説といえ、単に漢文を読む力をつける以上の価値があったと思います。また、特に『三国演義』は白話の要素もあるため、テキストに選ぶ際はややためらいもありましたが、丁寧に読んでいくうちに、熱心に参加してくれていた受講生からもだんだんと文法や表現方法に慣れてきたとの言葉をもらい、嬉しく思う場面もありました。

今後も、東洋の古典を読むという方針に基づき、以下のいくつかをテキストの候補とし、受講生の関心にそってテキストを決定し、授業を進めていきます。

〔経書関連〕

- ・『論語集釋』
- ・『孟子注疏』
- ・『春秋左傳正義』 etc.

〔小説〕

- ・『三國演義』（及び正史『三國志』）
- ・『封神演義』 etc.

『論語集釋』『孟子注疏』『春秋左傳正義』はそれぞれ古典として名高い『論語』『孟子』『春秋左氏傳』の注釈書であり、これらの原文をより深く理解するために有用な書となっています。特に『論語』などは一つの言葉が短いこともあって、理解の難しいところもありますが、歴代の注釈を参考にすることによって、自分なりの理解が得られるようになることに大きな意義があると思われます。

一方、『三国演義』や『封神演義』については、話自体が面白い、ということのみならず、白話の要素もあることで、漢文のみならず、現代中国語の学習にも役立つところがあるでしょう。授業の際は訓読してもらっても、現代中国語でよんでもらっても構いません。







春学期は、二つのクラスを担当し、一つめは MMT（現代貨幣理論）を扱いました。総裁選でも MMT が主張する「主権通貨を持つ国は、デフォルトすることがない」ことが論じられました。この考えてについては、それでは無限に国の借金を増やしてもいいのかという批判がしばしばなされますが、MMT においては、インフレ率という条件が示されます。デフレが 20 年以上続く日本においては、2~3% 程度のマイルドなインフレに達するまで、積極的な財政政策を取ることができると考えられます。MMT が主張する「就業保証プログラム」については、失業率よりも非正規雇用が問題となっている日本においては適当ではないのではという意見も出ました。政府や民間による雇用の創出は、 unnecessary 非正規雇

用を増やすだけであり、それよりもベーシックインカム等により消費を喚起する方がいいのではという意見でもありました。総裁選では「新自由主義からの脱却など」、緊縮財政から積極財政への転換が主張されましたが、現政権ではそれがトーンダウンしている印象があり、今後も議論が必要ではないかと考えます。

もう一つのクラスでは、ミシェル・フーコーの『監獄の誕生』を読みました。監獄だけでなく、修道院、兵舎、工場、そしてより身近な例として学校において行使される規律訓練型の権力を描くこの著作は、社会学、歴史学、哲学など様々な分野で大きな影響力を持つとともに、学校生活に違和感を感じたことのある人にとっては、自分のことを語ってくれているという感動を与えてくれる本です。そして、有名なパノプティコン（一望監視型監獄）の例は、監視の目を意識して、自らの意思で自分の行動を律する（規律化する）という近代の権力メカニズムを象徴的に表しています。コロナ禍において、法による強制ではなく、自粛を求められる日本の現状は、フーコーが描いた規律訓練型の社会を想起させます。また、改めてこの本を読み直して印象に残ったのは、後半の監獄の失敗が語られるところでした。監獄や学校における規律化のメカニズムを見事に描いた後、フーコーは監獄が規律化に失敗していたと述べます。実際に監獄が行っているのは、犯罪を繰り返し、監獄を出てはまた入るといふ「非行者」という集団を作り上げることだといいます。それにより、政治犯のような現行の秩序を脅かす存在を、社会から分断する機能を担っていたとします。



このような完全に規律化せずにコントロールするという発想は、秋学期から読み始めた『安全・領土・人口』へとつながります。『監獄の誕生』が法システムから規律システムへの変化を示していたのに対して、この講義録では、安全システムへの変化が論じられます。安全システムとは、自由を前提とした統治のことで、人々にある程度自由を与えた上で、統計データ上、問題が生じれば介入するというより効率的な統治システムです。規律から安全への変化には、市場の自動的秩序に任せる（自然に任せる）方がうまくいくという経済的自由主義の成立が契機となるとされ、フィジokrat（重農主義）による経済学の形成は、統治技法の変化を示すエピソードとして読み替えられます。注意が必要なのは、法・規律・安全と統治技法が入れ替わるわけではなく、重点の置き方が変わっていることで、この三つのシステムが併存しているということです。コロナ禍の社会で主に働いているのは、どのシステムなのか？また例えば日本とヨーロッパを比べた場合、主要なシステムは異なるのかなど、フーコーの議論は改めて読み直す価値があると考えています。



春学期と、夏季の講習会で、ジャン・ティロール『良き社会のための経済学』（日本経済新聞出版、2018年）を読みました。経済学に対しては、世界金融危機を予測できなかったことや、サンデルが『それをお金で買いますかー市場主義の限界』（早川書房、2012年）で批判したように、全てをお金の問題に変えてしまうという批判がありますが、ティロールはサンデルの意見は近年の経済学の発展への理解不足が原因であり、行動経済学などによって、誰にとっても善い社会（共通善）を実現することが可能になると主張します。ティロールは、市場には格差の解消を実現する機能はないと明言し、政府と政策を提言する経済学者の役割を強調します。ティロールは、経済学者が適切なインセンティブを設定することで、無理なく人々の行動を導くことができるとし、金融恐慌や環境問題など、具体的なテーマについても、極端ではないバランスの取れた政策が提言され、非常に学びの多い本でした。



秋学期は、ガイ・スタンディング『ベーシックインカムへの道』（プレジデント社、2018年）を読みました。ベーシックインカムは、年齢や性別、婚姻状態、就労状況、就労歴に関係なくすべての個人に、権利として、現金（もしくはそれと同等のもの）を給付する制度のことです。個人に対して、無条件に、定期的な、少額の現金を配る制度で、すべての個人を給付対象とする普遍的な制度であることから、「ユニバーサル・ベーシックインカム」とも呼ばれます。無条件とは、所得制限を設けないこと、お金の使い方に制約を設けないこと、受給者の行動に制約を設けないことです。ベーシックインカムは所得の最低水準を保障するもので、既存の社会保障を廃止するかは別問

題であり、病気や障害に対する社会保障と併用することが可能です。この本でスタンディングが強調するのは、社会の富はみんなのものという考えの下、ベーシックインカムは社会正義を実現するための権利だと考えるべきだということ。そして、個人の意思決定は誰の介入も受けない状況であるべきだとする「共和主義的自由」を体現するものであるべきだということです。ベーシックインカムについては、これまで様々な地域で実験されてきましたが、健康状態や、子供の就学率の向上、犯罪率の低下が見られ、労働意欲の低下もほとんど認められていません。支給を受けた人は、アルコールや麻薬、ギャンブル等ではなく、自分の生活を向上させるためにお金を使う場合が多く、食糧などの現物支給や、用途が限定された支給よりも効果があるという結果が出ています。現金での支給の効果については、途上国への支援においても認められており、絶対的な貧困を解消する効果が期待できます。日本では、生活保護の捕捉率が約二割とされており、ベーシックインカムが導入されれば、複雑な手続きや尊厳を侵害することなく、最低限の生活を保障することが可能になります。

クラスでは、絶対的な貧困の解消が可能になるとしても、しばしば期待される経済成長の効果は、どこまで期待できるのかという意見が出ました。また、共和主義的自由など、日本とは異なる思想的起源を持っており、日本に導入する際には、自由や労働についての意識が少なからず変化する必要があると思われます。財源に国債を用いる場合も、MMT（現代貨幣理論）で主張されるように、インフレ率に注意する必要があるし、実施する際には、支給額を徐々に増やして行き、慎重にベーシックインカムの効果を検証していく必要があると思われます。課題は多いですが、コロナ禍の状況や、AI化の進展などをふまえ、今後より議論が盛んになり、選択肢の一つとして考察されるべき考え方であると考えています。

## 『現代世界史』

担当 吉川 弘晃

この授業では、19世紀後半以降の「現代世界史」を最近の歴史研究（主に読みやすい新書）を通じて学んでいきます。この20年間、特にIT技術の飛躍的な発展が政治・経済・文化、その他多くの局面で「世界の一体化」を推し進め、その起源は16世紀（大航海時代）や14世紀（モンゴル世界帝国）と諸説あります。しかし、ヨーロッパで確立した諸制度（資本主義・近代国家・衛生・大学・鉄道…）がその他の各地域へ拡大していくという意味で、「世界の一体化」が決定的な潮流となるのは19世紀半ば以降です。とはいえ、そうした過程でアジアやアフリカの各地域から、「西洋化」に対する自律的な反応（受容・反発・変容）が見られたのも（特に20世紀以降は）忘れてはなりません。世界が激しい流れのなかで一体化していく歴史、すなわち「現代世界史」について、講師と受講生が一緒にテーマを決めて学んでいきます。

春学期は、主に「現代世界史」を学ぶために必要な概念や理論（資本主義・ナショナリズム・歴史哲学・近代化・文化理論など）を、秋・冬学期はより具体的かつ実践的な歴史（日本及びそれ以外の地域にまたがる近現代史）を扱います。参考までに2021年度に用いた教科書を挙げておきます。

春学期：柄谷行人『世界共和国へ』岩波書店、2006年

秋学期：三谷太郎『日本の近代とは何であったか』岩波書店、2017年

冬学期：中野耕太郎『20世紀アメリカの夢』岩波書店、2019年



以上のように選んだテキストをもとに、①「現代世界史」を巨視的に眺めるための道具を用意した上で、②「現代世界史」をめぐる問題について私たちの住む日本という地域から考えるとともに、③他の地域の事例を比較・検討することで、日本の事例を相対化していくこと、を目指しています。

この授業は開講したばかりなので、試行錯誤を続けておりますが、上記に関わるもので何か読みたい本や扱ってほしいテーマがあれば、お気軽に教室までお問い合わせくだされば幸いです。どうぞよろしく願いいたします。

## 『西洋近代思想の古典を読む』

担当 谷田 利文

春学期は、ホブズの『リヴァイアサン』を読みました。自然状態や社会契約が論じられる国家論だけでなく、今回は第一巻の人間論も含めて読みました。第一巻は、難解な部分も多いので心配でしたが、ホブズの人間の本性に対する冷静な分析や、幾何学をモデルとした記述に対して、面白いという感想を聞くことができました。逆に国家論においては、主権者への反抗を許さない記述に対して、共感できないという声も出ましたが、「一人の君主、政治家の独裁というイメージより、システムとして社会契約を考えてはどうか」という意見が出ました。つまり、宗教戦や内乱が続く中、それを解決するため、暴力を管理するリヴァイアサンという人工的人間（システム）を作ったという考え方です。それでもやはり、自分の人格ごと国家と一体化することは、国家＝自分を守るために、個人の自由や生命が損なわれる可能性もあり、近代国家の危うさもホブズに読み取ることが可能だと思われま。個々人が自分の生存を保障するために、国家を作ったはずですが、生活保護の問題など、国家が誰の生命を保障するかを決めているという問題もあり、今日でもホブズを読み直す価値があるのではないかと考えます。



秋学期からは、ロックの『統治二論』を読んでいます。『統治二論』は主に後篇が読まれてきましたが、前篇では、フィルマーの王権神授説が聖書の記述を詳細に検討することで批判されます。フィルマーは、神がアダムに与えた支配権がイングランド王に継承されたと主張し、人類は生まれながら支配と服従の関係に置かれるとしました。それに対して、ロックは人類は自由で平等な存在として、神によって創られ、そのため自分の身体、自由、財に対する固有権が保証されなければならないとします。また、神によって創られた様々な物に対して所有権が与えられるのは、耕作や採集など、自分の手を労働によって加えるためだとされます。ロックの思想は、基本的人権の尊重など、日本国憲法にも継承されていますが、それが宗教的な起源を持つということは、日本における西洋思想の受容についてより深く理解する機会を与えてくれると考えます。

以前から断続的に開講されてきたこの授業ですが、受講者と講師で相談しながら課題図書を決め、毎週少しずつ読み進めていきます。テキストは基本的に「日本文化論」「日本社会論」もしくは「日本人論」と呼ばれるような評論・エッセイを中心に選んでいます。そこはあまり厳密には考えていません。ある程度「日本」に関するテキストであれば何でも構わない、くらいのスタンスで続けてきました。現在は社会人の方一名と一緒にオンラインでの授業を行っております。

ちなみに、この受講者の方は元々とりたてて「日本文化論」というジャンルに関心があったわけではなく、とにかく何らかの人文的教養に触れて勉強し直したくて受講を希望されたとのことでした。そのため、最初は「本当にこの授業で大丈夫だろうか、楽しんでもらえるのだろうか」と心配していたのですが、実際に授業を重ねていくうちに杞憂だとわかりました。社会経験が豊かな方ほど「日本」にまつわる議論に触れるとこれまでの生活で心当たりがある所も多いようで、毎回話題は尽きません。テキストの内容についての解説はもちろん、お互いの日常で起こる様々な出来事も話し合うための素材となっています。



こう書くと、まるでこの授業は世間話ばかりに興じる不真面目な集まりなのかと思われるかも知れませんが、それは違います。世間話ばかりしてはいない、という意味ではありません。不真面目ではない、という意味で違うと言っているのです。この「日本文化論を読む」では、真剣に世間話をするを授業の大きな核だと考えています。そしてそれは、「日本文化論を読む」という行為と深い所で結びついているのです。

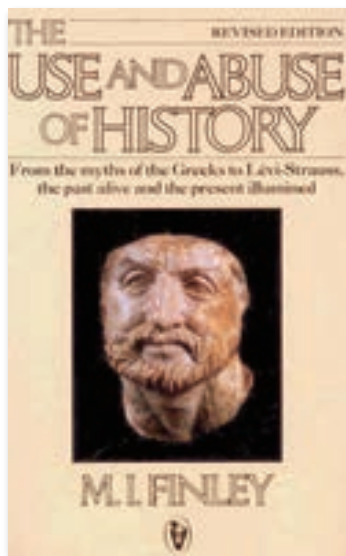
現在の受講者の方と授業を開始してから取り上げたテキストは、三つあります。最初は、山本七平の『空気の研究』。次に、『NHK「100分de名著」ブックス 岡倉天心 茶の本』を使いながら、タイトルにもある岡倉天心の『茶の本』の内容を。そして、岡倉とも縁の深い哲学者、九鬼周造の『「いき」の構造』と、どれも古典と呼ぶにふさわしいものばかりを読んできました。しかし、こうした著作を紐解けば紐解くほど、痛感することがあります。それは、優れた「日本文化論」とは、「日本文化とはこういうものだ」といった独断や「日本文化は素晴らしい」といった自文化礼賛、または「日本文化は世界と比べてこんなにも違う」という日本特殊論と似て非なる議論だということです。

もちろん、先ほどあげたどのテキストにも、日本文化をどう規定するのか、他の文化と比べてどこが優れていてどのように異なるかについての記述は出てきます。しかし、それらは全て、ただ日本のことを知るためだけではなく、日本を含めた世界をよりよく知るためであり、さらには日本および世界を構成する一点である自分自身をよく知るためのプロセスなのです。「日本文化論」とは、世界と自己、この二つをより具体的により鮮明に捉えるための思考の枠組みを提供してくれる、格好の叩き台なのです。

そういうわけで、この授業で取り上げてきたようなテキストを熟読すれば、私たちは半ば必然的に、自身の日常についても反省せざるを得なくなります。先ほど「真剣に世間話をする」と書いたのは、こうした考えが背景にあったのでした。この授業ではこれからも、テキストの逐語的読解と同じぐらい、いや、ひょっとするとそれ以上に、自分たちの生活からにじみ出るリアリティを見つめ直すことを大切にしていこうと思っています。



## 『ギリシア・ローマの歴史を読む』 担当 大野 普希



「ギリシア・ローマの歴史を読む」と題して、今春から英語でギリシア・ローマ史を勉強するクラスを開講しました。テキストとして選んだのは、西洋古代史の大家モーゼス・フィンリーの円熟期の論考を集めた *The Use and Abuse of History* という論集です。その中から“The Ancient Greeks and Their Nation”という、15 頁ほどの短い章を取り上げて読み始めたのですが、英文も内容も一筋縄ではいかない読みごたえのあるもので、春学期と秋学期を通してようやく 10 頁程を読み進めました。

最初は、受講生の方々にその場で担当を割り当て、口頭で訳してもらうというやり方をとっていたのですが、ありがたいことに、講師が想定していた以上に、訳語の選定や文構造の理解を巡って議論が白熱するようになりました。そうするとやはり訳文を文書化した方が便利だということになり、秋学期からは、事前に各々の担当範囲を割り当てて訳文をつくってきてもらうようにしました。授業ではそれに基づいて各人の訳を検討しつつ、内容についても講師が適宜解説を加えています。

さて肝心の内容ですが、“The Ancient Greeks and Their Nation”の主題は、「古代ギリシア人にとってギリシア人であるとはどういうことだったのか」というものです。素朴な問いですが、それだけに答えるのがとても難しい問題です。ギリシア人とは何者であるかということギリシア人自身が明示的に語っている、「いかにも」な史料だけを選び抜いてきて、それらを総合するという通り一遍の方法では、この問いに答えることはできないとフィンリーは言います。ではどうすればいいのか。重要なのは、ギリシア人がギリシアについて語る際のコンテキスト、さらにはギリシア人がギリシアについて語っていない場合には、その「沈黙」という現象そのものの意味を明らかにすることである、と彼は言います。

例えばヘシオドスに『仕事と日』という作品がありますが、これはフィンリーによると「沈黙」の好例です。ヘシオドスの描く世界はほとんどの場合、血縁・地縁でつながった小さな共同体の枠内で完結しています。しかし、ひとたび話とその外部に及ぶとき、有名な「五時代の説話」のように、それは一気に人類全体へと飛躍するのです。つまり、ここには身近な世界と人類全体という 2 つの参照点しかないのであって、その中間に位置するはずのギリシアについてヘシオドスは「沈黙」しているのです。



Moses I. Finley (1912-1986)

このように、ギリシアへの帰属意識というものを最初から特権化するのではなくて、血縁集団から都市や人類全体に至るまで、古代ギリシアの人々が帰属意識を持っていた広狭様々な集団に目を向けることで、ギリシアはそれらの中の 1 つに過ぎないものとして相対化されます。そうすることによって、ギリシア人にとってギリシア人であることが何を意味し、それが彼らの生活全体の中でどの程度重要であったのかを徐々に明らかにしていくことがフィンリーの狙いです。

論の展開も結論ありきのものではなく、まずは 1 つの視点から分析してみて、難点が見つかればまた別の視点を持ってくるといふ具合に進むので、著者の思考過程を追体験できる反面、読み手は時にそれに振り回されて文脈を見失いそうになります。英文を読解するだけでなくフィンリーの主張の全貌を理解しようとする受講生の方々の熱意と鋭い質問に支えられて、ここまで何とか振り落とされずにフィンリーの思索の跡を追いかけてきました。冬学期はラストスパートをかけて、その結論を見届けたいと思います。

## ● 北白川幼稚園 山下育子のダイアリ 自然と子どもたちの世界 より

山の学校の母体となる幼稚園の活動の一端をご紹介します

副園長 山下 育子

### 〔12月のひみつ森〕



12月2日晚秋のひみつの森。園庭つづきのこの”森の広場”までは歩いて約5分。四季折々の自然の変化を感じながら、子ども達は日常的にこの場所を訪れています。広場を通り過ぎ、東山三十六峰の一つお隣りの峰「茶山」へ、そしてさらにその先まで足を延ばすこともあります。

森は、子ども達が主体的に働きかけながら多くの学びを得られる場所です。空気の匂い、風や鳥の声、日々変化する太陽の陽射しや樹木の変化など待ち受ける自然の懐は深く、訪れるたびに新鮮な気持ちになります。手で触れる木、枝、葉、土、水分など自然の素材は子ども達の働きかけに必ず応答してくれますし、その過程で子どもたちは自然と呼吸を合わせ、自らを調整する力を養います。生きた自然の世界は新たな驚きや発見、感動に満ちていて、子どもたちは園庭とは異なる大いなる世界を謳歌する喜びを味わいます。前に登れなかった木に再び挑戦したり、ぶら下がる木を自ら見つけたり、好きな木を見つけ想像しながら見立てあそびも楽しめます。今までの森のあそびでは落ち葉や枝を見つけ、木々に触れながらの木登り、さらに広場から20分ほど森の奥へと進んだ広大なすり鉢状の谷（ひみつの谷）の斜面を昇り降りするチャレンジなどが主でしたが、12月に入り子どもたちの感性をより豊かにするための新たな取り組みを導入し様子をうかがっているところです。



＊ ＊ ＊ ＊ ＊

あおいつりがねそう

あおい あおい つりがねそう

ぼうしがとっても よくにあう

さあおどりましょう おはなのわのなかで

そこにとまって ぐるりとまわれ

ひざまずいて てをとりましょう

たのしく おどりましょう はなさくのはらで…

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

ゆったりとした五度の音域で魂（こころ）にやさしいスイスの歌です。はじめは三度音域だけの歌の繰り返しがつづき、ゆっくりとしたテンポで歌い、聴き、耳を澄ます力が養われるとともにいつしかことばも呼吸もやさしく動いています。この鄙びた独特の旋律をどうやら子ども達は気に入ってくれたようで、森に来たときにはみんなで輪になりまず歌っています。写真はみんなが輪になった中を、二人の子が森の動物に扮して一周回っているところです。みんなは手拍子でゆっくり定テンポのリズムを取りながら歌いつづけます。歌いながらお友達がなにの動物に扮しているのかを思いめぐらせます。歌が終わると「わたしはだれでしょう？」と中央の二人が皆に問いかけると「とり！ 🐣」と子ども達の応えが返ってきたので大正解！という結果になりました。羽を広げて飛ぶ鳥と、もう一人はひよこ 🐣 がびよんびよんと飛んでいるジェスチャーでした。こうして再びお歌は続いていきます。園舎から離れた静かな森の空間で皆が一つになり、この日も集うことができた喜びを共有しながら心穏やかな一体感に包まれています。

そのあとはいつもの自由あそびです。早速木々の間に枝を立てかけて「家」をつくっています。横たわった樹木の上では、手を左右に広げ平均台を渡るように先端まで歩いてバランスを取りました。その奥では、ほどよい高さの木の上までのぼっていき一休みしている二人の女の子。結構な高さがある場所まで手足を精いっぱい伸ばし、体全体の力を駆使してよじ登りました。



こちらは丸太の上を歩くバランスあそびです。反対方面では積もった落ち葉を手で掻き集め、頭上に巻き上げて落ち葉のシャワーを繰り返し楽しんでいます。「楽しみ」は他と分かち合うことによって倍にも三倍にもなるものです。たまたま近くにいた子と落ち葉のシャワーを繰り返しかけ合いながら、陽射しを受けてキラキラと輝き舞い落ちる自然の美しさも共有しています。大人も子ども達と感動や発見を分かち合います。そして別の場所では、好みの木を選んでよじ登りました。



ずいぶん高くまで登りました。手足でしっかりバランスを取っています。右上写真は「家」で、いつも変わらず子ども達の動きを受けとめてくれる楽しみな存在です。もっと大きな木に身を寄せることもあります。木は私達と同じように生きてるので、風に揺れるリズムや鼓動まで聞こえるかも知れません。森のあそびを身近に取り入れるために園庭用の遊具が開発されましたが、森はすべてが自然物なので子どもの体と心にとって馴染みやすく、いつも子ども達を包み込んでくれる生きた存在なのです。

そろそろお昼が近づきお腹も空いてきました。走りながら園に戻る森の一本道がとにかく楽しい子ども達です。ちょっぴり前の列と間隔を空けておき、勢いよく数名でダッシュする楽しさは格別！落ち葉の道も凹凸のある土の道も、上手く選り分けながら森の中を走り抜けて園庭に到着です。

### 〔11月 ラディッシュが育ったよ／年少〕

10月に入ったお天気のよい日に、ラディッシュの種をひみつの庭に植えました。

毎日のお水やりのお世話ですくすく生長したラディッシュは、手にするなり丸やら長い楕円やらでびっくりの子ども達。葉も生き生きとした緑色で、一人ずつ収穫して水を張った大きなボウルで洗いました。

必要な分量だけ収穫したみずみずしいラディッシュ！壁泉プールに腰かけ、手を清潔にしてからいただきます。

大きなラディッシュをかじってみるところ…「おいしい！」「すこしからいよ（ほろにがいの意味）」と笑顔がこぼれます。実は大きくてカリカリと音がし、葉っぱも甘くすぐに食べてしまいました。

容器に残った”みそマヨ”ディップが美味しいの…。この日は感動で胸が温かいままクラスに戻り、早速ラディッシュの絵を描きます。5月の森に分け入り太陽の陽射しが樹木の葉陰で輝く様子を眺めたら、すぐにクラスに戻って森の絵を描くこと



もあります。そんな時、子ども達は目をキラキラと輝かせながら筆を走らせています。

絵の具で赤いらデッシュ、シャキシャキと美味しかった葉っぱが鮮やかに描けました。クラスでも美味しそうならデッシュの出来上がり！土をコンテを使って手でのばしたら完成です。



〔メダカの観察・絵画&ちぎり絵で表現（年長クラス）10月半ば〕

各クラスで毎日エサを与えながら飼っている大切な仲間であるメダカ。藻や、水辺のお掃除屋さんでもあるタニシやカワニナの動きとともに観察中です。

ひみつの庭のピオトープの黒メダカよりも間近で観察しやすく、動きを目で追う姿がよく見られます。絵の具、和紙、綿棒、割り箸を使い水槽のメダカを表現してみました。お母さんとお父さんとKくんとわたしなの…ご家族を思い出しながらほのぼのとした表情でつづやっていたAちゃん。

下に敷いた砂利も細かく描きました。藻もよく見ながら描きました。



〔アリの観察・絵画表現（年長クラス）10月半ば〕

こちらのクラスは秋から園内に見られる数種類のアリを採取し、アリを飼うための容器を作り巣づくりにチャレンジしました。

違う種類のアリを入れると巣を作らないこと、容器に入れる砂の粒が大きすぎても巣を作りにくいことなどがわかり試行錯誤が続きました。そうした飼育観察中に、土の中で展開している巣の様子を想像を加えながら描いています。「これはね、いまお風呂に入るところなの」。土の中には楕円形のお部屋がたくさん描かれています。

茶色いアリの道に何匹かの活動中のアリが見えます。アリの道、アリの住む土中の世界を黙々と描きました。

完成後、一人ずつが言葉による絵の説明を加えました。



- (左上)・・・赤アリがいるよ。お風呂場でご飯たべるところがあるよ。いちばん大きいアリがいるところは、たまごを産むところで、黒いアリがいるところはキッチンだよ。
- (真ん中)・・・緑と黒の女王アリが間違えて入ってきて、小さい黒いアリがびっくりしている。青色と薄紫色のアリは眠そうで、灰色のアリは休憩しているところ。
- (右上)・・・プールと遊ぶ場所とお風呂とキッチンとお庭があるの。まわりは海。



## 〔ひみつの庭で野菜畑を描く／アサギマダラとともに（年中クラス）10月半ば〕

秋。ひみつの庭の10月はたくさんの種類のチョウがまさに夢のように乱舞しました。主にメキシカンセージ、ブッドレア、フジバカマの植込みに訪れます。そんな中、日本列島を北から縦断して南は九州、台湾、中国方面まで何千キロという長い旅をするチョウ”アサギマダラ（学名 Parantica sita）”が、遥か数百メートル上空からひみつの庭のフジバカマの花を見つけて飛来してくれました。幸いにもその個体数は多く、日常的に子ども達が間近に観察することとなりました。

「ほら、またそこにとまったよ！」

畑でみんなで育てている野菜を描いていますが、まるでアサギマダラの観察も兼ねたような幸せな時間となりました。チョウは子ども達に止まりながら、フワフワと独特な飛び方でフジバカマの植栽に戻り蜜を吸います。ゴマダラチョウの白い部分を浅葱色（水色）に塗り替えたような綺麗な色のアサギマダラを子ども達は気に入っています。季節の便りとして新聞紙上にも掲載される珍しいチョウです。



この日も数頭のアサギマダラとオレンジ色のツマグロヒョウモン、アゲハチョウ、シジミチョウの姿が見られました。畑ではブロッコリー、ロマネスコ、大根、赤カブを育てています。毎日お世話をしながら野菜の生長を見つめ、収穫の喜びへとつないでいます。



## 自由あそび時間～アサギマダラをつかまえたよ！

アサギマダラは翅に鱗粉がない特別のチョウなので手で掴むことができますが、詳しい生態はまだ解明されていない不思議なチョウです。年長のRくんがこの日手にしたチョウには研究のためのマーキングが翅に記されていて、調べてみると二週間前に信州から飛んできた個体であることがわかりました。一日約20kmを飛び続けて京都のこの山の上にもやってきてくれたのでした。気温が低くなるにつれ再び温かな地方へと旅を続けるアサギマダラ、いよいよお別れの季節がやってきたのが11月でした。また来年も来てくれますように🍀



## 〔落ち葉でつくった腐葉土で畑づくり🍂（全学年）10月初旬〕

昨年の秋、みんなで集めた森やお庭のコナラ、クヌギ、サクラ、モミジなど広葉樹の落ち葉が時間とともに発酵し、園庭のコンポストで栄養のある黒い土になったことを絵本とともにお話しています。

右が今年の落ち葉🍂、左が昨年の落ち葉からできた土。子ども達は手で触りながら土になった腐葉土を確かめます。みんなが大好きなダンゴムシ、森に生えるキノコやもっと小さな生きものが、落ち葉を小さくバラバラに分解する役目をしてくれます。



こうしてできた土で育った葉を食べて動物が育ち、私達も土で育った野菜を食べることができるので土はとても大切なものです。今年もクラスで飼っていたチョウの幼虫が羽化し空へ飛んでいくのをみんなで見守りましたが、飼っていた昆虫が動かなくなればお墓をつくって土に埋めてあげました。身近な昆虫など命あるものはすべてがやがて土になることを一緒に考える時間を持ちました。

それではひみつの庭の野菜畑まで、コンポストからみんなで手分けして運んでいきましょう。



畑には子ども達が往復して運んだたくさんの腐葉土が加わり、みんなで手で混ぜ合わせるとやがて黒い畑の畝が広がりました。一部の腐葉土の中にはカブトムシが入り込んで産卵し、大きな終齢幼虫が何匹も現れました。子ども達は可愛い可愛いと興味津々！手の平のせて嬉しい観察の時もありました。みんなで最後まで頑張りましたね。次はいよいよ冬のお野菜の苗を植えて育てることにしましょう。



### 〔風鈴づくり(各学年)～7月末〕

7月。セミが賑やかに鳴いていた夏。全学年でガラス風鈴にアクリル絵具で絵付けをする活動を行いました。

普段から描くこと、つくることが大好きな子ども達。新たなことにはさらに好奇心が膨らみます。大小の綿棒を使ってガラス面内側に思い思いに描き、同時に風鈴の短冊をにじみ絵で作りました。夏休みにはお家の窓辺で、風の揺らぎとともによい音が響いていたことでしょう。懐かしい夏期保育の思い出の一コマでした。



### 〔なすの収穫と調理(年長クラス)7月初旬〕

春5月に植えたナスの苗が大きく生長し、畑はたくさんの実りを迎えました。

次々と紫色の花が咲き、何度もナスを手で収穫し調理しました。メニューは・・・

- ナスのソテー(オリーブオイル、かつお節、醤油)
- ナスのトマト煮(オリーブオイル、ガーリック、トマト缶、ブイヨン、イタリアンハーブ)



夏野菜のナスをオリーブオイルで両面ソテーして、かつお節をたっぷりのせて+お醤油が大人気!! シンプルで驚きの美味しさです。続いて夏のお味のトマト煮も子ども達はペロリと完食。多少苦手意識のある子も、みんなで育てたものを調理するという一連の流れを体験する中でいつしか意識も変化し「美味しい!」と目を輝かせることはよくあることです。食べる力=生きる力となります。別の日のメニュー●ナスとピーマンのそぼろ中華炒めも大人気! とても美味しかったですね●

畑の土からたくさんの実りを得ました。土から育った力強さを感じる絵です。その他力作がたくさん揃いました。

〔きゅうり🍆の収穫～絵画へ（年中クラス）7月半ば〕

ひみつの庭の奥で春5月からきゅうりの苗を育てました。



ツルが伸びて、黄色の花のあとは実が次々になりました。雨が降るたびに大きくなるきゅうり。子ども達も大きなきゅうりが収穫でき大喜びです。

バットに氷水を張って暫くきゅうりを冷やしました。パリッと新鮮でみずみずしいきゅうり🍆そのまま美味しくいただきました。

そして絵画。色を含ませた太筆で、画用紙いっぱいに伸びやかに描きます。描きながら「気持ちいい～」と感じています。心のままに表現できる力を大切に育んでいます。

〔夏の水あそび～（壁泉🏞️からの水が流れ…）6月～7月中〕

夏の陽射し。壁泉から流れ出てくる水と戯れながら、何度も水あそびを楽しみました。



ウッドデッキの上で集まったり、一斉にバタ足で白い水しぶきが弾ける中、思いきりはしゃぐ歓声が森の中へ響き渡っていきました。6月から何度も楽しんだ壁泉プールの水あそびは夏の思い出となって今も心に蘇ります。

〔色水づくりのワンシーン✿〕



ここ数年、園長室勝手口にて二列に並んだ子ども達と”色水づくり”を続けています。いつの間にか長蛇の列で賑わい、自然の花を主としてつくる色づくりの楽しさが広がっていきました。列に並んでいる時は勿論、つくる時は真剣そのもので集中してつくります。集中力をつけるには好きなこと、楽しいと感じられることを続けるに限ります。今夏以降は園長室からひみつの庭のテーブルに移

動し、近くの実や花を使い、また花の季節に摘んでおいたローズペタルや剪定した緑の葉を材料にしました。色水づくりのみならず加えて香りのポプリづくりも楽しんでいます。そうした五感を豊かにする楽しみが絵画の色使いにもつながることを願いながら、また予期せぬ色生まれ心がときめく喜びを分かち合いながら、子ども達のやわらかな感性が伸びやかに育っていくことを願っています。（山下 育子）

## 異動のお知らせ

これまでご指導下さいまして、誠に有難うございました。これからのご活躍も、心よりお祈り致しております。(敬称略)

カク ミンソク  
● 郭 旻錫

担当：「韓国語初級」「韓国語講読」担当（2021年4月～2022年1月）

クラス便り p.26

京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期過程在学中。研究による帰国・往來のため退職される運びとなりました。同時に学術振興会特別研究員着任（2022年4月～）。

## 新任講師のご紹介

2021年度1月より着任される先生をご紹介致します。(敬称略)

コ ジュファン  
● 高 周煥

担当：「韓国語初級」担当（2022年1月～）

専門学校韓国語学科非常勤講師（2019年4月～）、京都大学大学院 法学研究科 法政理論専攻 博士課程在学中。

### ＜● 巻頭文つづき＞

という話をしています。

「未来を見て、点と点を結ぶことはできない。過去を振り返ってそれらを結ぶことができるだけだ」。

この考えにならえば、希望とは結ぶことのできない点と点をつなぐ空しい試みにほかならず、冒頭で見たように不安がつきまとうのも当然だとわかります。我々は人生にドット（点）を打ち込むこと、すなわち、「今を生きる」ことに専念すべきであり、それには、本当にしたいことを見つけ、その仕事を愛し、誇りをもつことが何より大切だと言います。ジョブズ氏はさらに、「もし今日が人生最後の一日だとしたら、今日やろうとしていることを自分はやるだろうか」と毎日自問していることを打ち明けたうえ、次のように締めくくります。

「皆さんの時間は限られています。だから、誰か別の人間の人生を生きて時間を無駄にしてはいけません。ドグマに捕らわれてはいけません。それは別の人間が考えた結果に従って生きることと同じです。騒々しい他人の考えの押しつけの前に、皆さんの内なる声がかき消されてはなりません。何より大切なことは、自分の心と直感に従う勇気を持つことです。どういうわけか、心と直感は、自分が本当はどう生きたいのかをとっくに知っているのです。それ以外のことは何もかも二の次、三の次でよいのです」。

このメッセージに照らすとき、先に挙げた一心不乱に遊ぶ幼児の姿は、「内なる声」に忠実に生きるお手本だと受け取れるでしょう。ただし、幼児は自然体で「今を生きる」ことができるのに対し、学校に通う子どもたちや、社会で働く大人たちは、否が応でも「外の声」に従わざるを得ない日常があります。必ずしも「内なる声」か「外の声」か、といった二者択一で考える必要はないにせよ、この二十年間をふりかえると、年々「外の声」が強まるとともに、その声に従順に従う若者——指示されなければ自ら動かない若者——が増えている傾向を感じております（これは非常勤で大学で教える経験に基づいての感想です。これは若者批判ではなく、幼児でさえ「今を生きる」ことがしづらくなってしまった現状が若者にも波及していることを憂えています）。

じっさい、「今を生きよ」や「死を思え」といった古典作家の言葉や、ジョブズ氏の投げかけるメッセージは、人生の「定跡」——成功のノウハウ——を声高に訴える「外の声」（ドグマ）に比べると、依然つかみどころのない、ややもすれば頼りない考えのように受け取られるご時世かもしれません。しかし、「頼りある」考えにたけた人間の例として、日本昔話の「欲張りじいさん」をあげることができ、他方、「今を生きる」代表として、「正直爺さん」をあげることができるでしょう。目的意識の鮮明なのが前者で、後者にそのようなものはありません。しかし、その後どのような展開になったのかはみなさんご承知の通りです。

希望と不安の中で生きる意味を上のように考えるとき、私はあらためて学問や芸術の追及する真・善・美を思い、子どもたちの教育のあるべき姿を思い、「楽しく学べ」（Disce Libens）という「山の学校」の理念の意味を再確認する次第です。(山下 太郎)

■ オンラインで、ラテン語講習会も実施しています。



ラテン語講習会

検索

■ 各種お申込み・お問い合わせは、ホームページ「お問い合わせ」フォーム  
またはこちらへ TEL: 075-781-3215 FAX: 075-781-6073  
13:30-21:30 (留守録可能です)